



cuadernos
VIDA CRISTIANA

本当の自分になる

幸せな人格の構築：医師、哲学者
司祭、教育者からの助言

ウェンセスラオ・ヴィアル 編

ウェンセスラオ・ビアル 編

本当の自分になる

幸せな人格の構築：医師、哲学者、司祭、教育者からの助言

www.opusdei.org

Contents

- 著者
- キリストのような人格
- 人生の主演
- 正しい自己愛（適切に自分を大切にすること）
- 徳の涵養による性格形成
- 心の整理整頓
- 人を成熟させる対話
- 隣人の気持ちをわかる
- 家庭は成長の場（1）
- 家庭は成長の場（2）

著者

この本は、人格形成のためのアイデアを提供することを目的とした学際的なグループから生まれました。著者陣の興味や研究分野の多様性が際立っており、内容を豊かにしています。神学者、哲学者、司祭、医師、教育者、心理学者などが、それぞれの知識と経験を提供しています。成熟した人格の特徴が取り上げられ、内的生活とキリスト教的良識という側面が重視されています。

アルフォンソ・アギロー：マドリードのタハマル校の校長を務めた。スペイン教育センター連盟（CECE：Confederación Española de Centros de Enseñanza）の会長を務めている。教育と人間学に関する11冊の著書を発表し、これらは様々な言語に翻訳されている。

カルロス・アイセラ：司祭。人文学とジャーナリズムの学士号を持ち、哲学博士（モントリオール大学）。現在、ヨセフ・ラッツィンガーの神学的業績を、聖アウグスティヌスにおける記憶の概念に照らして研究している（聖十字架大学、ローマ）。

ホセ・マリア・バリオ・マエストレ：哲学博士。マドリード・コンプルテンセ大学の正教授。

ホセ・ベニト・カバニーニャ・マヒデ：ジャーナリズムの学士号およびナバラ大学の神学博士号を取得。パンプローナ、マドリード、バジャドリッドの学生寮でチャプレン（司祭）を務めた。現在はマドリードのモンテアルト学生寮のチャプレン。

ハビエル・カバニェス・トルフィーノ：医学博士。神経科医であり、マドリード・コンプルテンセ大学で精神病理学を教える。

ファン・ラモン・ガルシア＝モラト・ソト：医師で司祭、神学博士。ナバラ大学医学部で哲学的人間学を教える。1985年から複数の学生寮でチャプレンを務める。

ハビエル・ライネス：マドリードのサン・ミゲル大聖堂長。コンプルテンセ大学で法学の学士号を取得。哲学博士。20年以上にわたり、様々な学校や教育機関での仕事に従事してきた。

ハビエル・セセー：司祭。数学の学士号と神学博士号を持つ。1985年からナバラ大学で霊性神学の教授を務めている。

ロドルフォ・バルデス：司祭、哲学博士。倫理学と人格形成の分野を研究。

ウェンセスラオ・ビアル：ローマの聖十字架大学神学部で「心理学と霊的生活」を教えている。司祭であり医師、哲学博士。

[Back to Contents](#)

キリストのような人格

「どうして私はあんな態度をとったのだろう」とか「なぜ私はいつもこんなのか」、あるいは「私は変わることができるのだろうか」といった疑問が頭をよぎることはないだろうか。時には「なぜあの人はあのように振る舞うのか」と他人に対して同じ疑問を投げかけることも。・・・私たちの目指すのは、霊魂の中でイエス・キリストが働かれるのを邪魔せずに、徐々にキリストに似たものになるというであるということ念頭に置きながら、この問題を深く考えてみたい。このキリストに似たものになるということは人間のあらゆる面に関わるものである。人間はキリストに近づくとき、キリスト教的召し出しに従って真に人間的な面を高める。というのは、イエス・キリストは真の神であり真の人間であるからだ。キリストの中に完成された人間を見ることができる。ヨハネ・パウロ2世も言うておられるように、「贖い主キリストは、(…)人間を人間自身に完全に表わしました。そして、それは――もしこう言えるなら――贖いの秘義の人間的な面であり、特質であります。そして人間もこの面において、自分の人間性の偉大さと尊厳と本来の価値を再び見いだします」(『人類の贖い主』10)。

洗礼によって与えられた新しい生命は、「わたしたちが皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」(エフェソ4・13)ように呼ばれている。確かに超自然的なものが個人的聖性の決定的な要素であるが、このことは人間的なものを内的かつ必然的なものとして包含することを忘れてはならない。というのは、「神の子としての責任を果たそうと努力する私たちに、神は真に人間的であれとお望みです。頭は天にまで届かせ、両足はしっかりと大地を踏まえていなければなりません。キリスト信者として生きると言っても、人間であることをやめたり、キリストを知らない人々のもつ諸徳を身につけるべく努めたりしなくてもよい、とは言えないのです。完全な神であられ、同時に完全な人間であられるキリストにならえ、という主のお望みに応えるために日々努力しなければなりません。キリスト者とは主の御血であがなわれた人間、人間的であると同時に神的な生き方をしよう、キリストが強くお望みになっている存在ですから」(『神の朋友』75)。

人格陶冶の作業

霊魂における恩恵の働きは、人間的な成熟、すなわち人格を陶冶する仕事と肩を並べて進む。それゆえ、聖性を目指すキリスト信者は、超自然の徳を培うと同時に、均整の取れた成熟した人間のもつ習性、考え方や動き方を身につけるよう努めねばならない。それは単に完全になりたいと望むことではなく、キリストの生き方に学びたいと望むことによってである。だから聖ホセマリアは次のように自己を究明するよう励ます。「子よ、人々があなたの中に探し求めているキリストはどこにおいでになるのだろうか。あなたの高慢の中だろうか。他人を威圧したいという望みの中だろうか。自分で克服しようとしないうあなたの性格の欠点の中なのだろうか。あなたの頑固さの中なのだろうか。そんなところにキリストがおいでになるだろうか。絶対にあり得ないことだ」と。そしてこれに対する答えの部分は人格陶冶の作業をするに当たってのヒントを提供する。「個性を持たねばならない。それは賛成だ。しかしあなたの個性がキリストの個性と同じになるように努力しなければならない」(『鍛』468)。

各人のパーソナリティには、遺伝的で生まれつきの気質と言えるようなものや、後天的なもの、すなわち教育や個人の努力、人や神との付き合いによるもの、また無意識のうちに影響されることさえある他の多くの要因が影響する。その結果、様々な種類のパーソナリティ、あるいは性格が生まれる。例えば、外向的な人と内向的な人、情熱的な人と冷静な人、のんきな人と神経質な人など。このような性格は、仕事の仕方や人との接し方、日々の出来事のとらえ方などに現れる。これらの要素は、いくらかの徳の成長を助長したり、あるいはもしそれを制御することをしなければ、欠点を大きくしたりすることによって、人格形成に影響する。例えば、進取の気性に富むという性格は、勤勉さを培うのに役に立つが、しかるべき努力をしなければ、移り気や活動主義という欠点に陥る危険もある。

神は私たちのパーソナリティを考慮に入れながら聖性の道に導いて下さる。各自のあり様は神が鋤を入れられる肥沃な土地のようなものと言える。私たちのすべきことは、忍耐と喜びを持ってその土地から神の恩寵の妨げとなる雑草を抜き取り石を除くことだけである。そうすれば、「あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実りを結び」始めるだろう。もし一人一人が、聖霊の働きに抵抗せず、キリストの御顔を反映するパーソナリティを作り上げようとするなら、各自の個性をいささかも損ねることなく、神から頂いた才能を十分に利用してそれなりの成果を上げることができるだろう。なぜなら、「天国の諸聖人が、それぞれ独自の個性を備えているように、あなたたちも各々異なっているはずである」からである（『道』947）。

私たちは各自の性格を磨き強めてキリスト教的な人格を形成する必要があるとはいえ、何か超人のようなものに変身することだと考えてはならない。実際、モデルはいつもイエス・キリストで、イエスは私たちと同じ人間の本性をお持ちになるが、それは恩寵によって高められ平凡さの中に完成された人間性である。もちろん、聖母マリアにもすばらしい模範を見ることができる。彼女には、人間的なものが余すところなくある。しかし、それは平凡さに包まれている。マリアのよく知られた謙遜と素朴さ（この二つはキリスト教の伝統のなかで最も評価された資質かも知れないが）は、彼女のすべての子供たちに対する愛情と優しさ（よい母親のもつ徳）と並んで、その事実をこの上なく証明している。最高の被造物（「あなたより優れているのは神だけです」 [『道』496]）であるマリアは、あまりにも人間的で、あまりにも魅力的な女性、至高の貴婦人であるのだ。

人間的成熟と超自然的成熟

「成熟」という言葉は、旬であること、用意万端整っている状態にあることを指し、そこから到達すべき段階に達していることを意味する。また成熟した人は自己の勤めを果たす。そのため、最もよい模範が主の生活に見いだされる。福音書の中のイエスを観想し、その人との接し方、苦しみを前にしての剛毅、御父から受けた使命を果たす際の決然たる態度を学ぶなら、成熟とはどういうものかを理解できるようになるだろう。

同時に、我々の信仰は様々な文化に見いだされる良いものを吸収する。それゆえに、適切に浄化しつつであるが、古典文化が教える人間的成熟に関する基準を学ぶことは役に立つ。それは、時と場所によって強度ややり方は様々であっても、何世紀にもわたってキリスト教がしてきたことである。例えばギリシア・ローマ世界は、成熟した人間のもつべき徳として知恵と賢慮を置いた。あの当時のキリスト教の哲学者や神学者は対神徳の優越性を示し、なかでもパウロが「完全性の要」と呼んだ愛徳を他のすべての徳に形を与えるものとして示すことで、この二つの徳の概念をさらに豊かにした。

現在では人間的成熟についての考察は、近代科学が提供する様々な見方によって豊かになっている。それらの結論は、キリスト教の人間観と対立しない人間観を基盤としている限り、大いに役に立つ。例えば、成熟度を計るとき、知的面、情緒面、社会的面の三つの面がよく区別される。知的な成熟度を示すものとしては、自分についての冷静な評価（自分について現実に近い評価を下すことは、自分自身に対して誠実であることの結果である）、正しい人生観、明確な個人的目標を立てると同時に（深さにおいても強さ

においても)無限に開かれた展望をもつこと、調和のとれた価値観、確固とした道徳観、自分と世界を前に健全な現実的味方を堅持すること、問題が起きた際に落ち着いて考え分析できる、創造性とイニシアティブを持つこと、など。

情緒面における成熟を示す特徴には、網羅するつもりはないが、次のものを挙げることができる。失敗をしたとき極度に気落ちすることなく、他方成功の前に現実を見失うことなく、人生の出来事に適当な反応をすることができること、自己をフレキシブルにかつ前向きに制御できる力、隣人に対して自己を与え寛大になることができる、決定や約束をしっかりと守ることができる、困難を前にして落ち着きを失わず挑戦できる、楽観的で明るく人好きのする性格とユーモア。

最後に社会的面での成熟さの部分としては、隣人に対する誠実な愛情、隣人の権利に対する尊敬と、その必要性を見つけ助けたという望み、異なる意見や価値観や文化的側面の人に対し偏見を持たずに理解しようと努めること、周囲の支配的な文化や圧力団体や流行に対して、批判的な目をもち流されないこと、人の言うことを聞き理解する能力、分け隔てなく他人と協力することができること。

成熟への道

これらの特徴を次のようにまとめることができるだろう。つまり、成熟した人とは人生において明快で調和の取れた高度な企てを計画・実行でき、かつその実現のため必要な積極的な態度を容易にとることができる人、と。いずれにしても、成熟した人になるためには、様々な状況や段階からなるプロセスを経なければならない。人間としての成長は、時間がかかり段階的であることが普通である。ただし、個人の人生において目を見張るような飛躍があることもある。たとえば、初めての子供が生まれることは、ある人には新しい責任を自覚させ、その人生を画期的に変化させることがある。あるいは、厳しい経済状況を乗り越えた後で、自己の人生にとって何が本当に重要なのかを深く考える機会を持つこともある、など。

この成熟に向けた道において、恩寵がいかに人を変えるかが浮き彫りになる。最も著名な男女の聖人たちの人生をざっと見るだけでも、彼らの中に高い理想、自己の確信の確実さ、自己についての最も正確な評価である謙遜と同時にあふれるような創造性や自主性、実行に移された献身や愛の能力、人に伝わる楽観的な見方、あらゆる人に開かれていること(結局、使徒職の熱意)などが認知できる。その明らかな一例が聖ホセマリアである。彼はまだ青年のときから恩寵のおかげで成熟した人格が形成されていったことに気づいていた。自分が、困難の中で、尋常ではないほどの安定した気持ちがあることに気がついていた。「どうも主は私の魂に平和というもう一つの特徴をお与えになったようだ。平和をもち、平和を与えること。私が指導したり話したりする人たちの中にそれが確認される」(『霊的覚書』1095)。彼には詩編118の言葉「私は老人より分別がある。あなたの掟を守るがために」を当てはめることができた。だからといって、普通は成熟した性格を身につけるには時間と失敗と成功がいる。それらは神の摂理に織り込み済みである。

恩寵と時間を勘定に入れる

たとえある人が成熟に達したと言える時があるとしても、各自の人格を磨く勤めは一生続く。自分がどんな性格なのかを知りそれを受け入れれば、少々の失敗に落ち込むことなく楽観的にこの勤め続けていくことができる。これは中途半端な状態と妥協することとは違う。それよりもむしろ、英雄的に聖性を目指して生きるためには、すでに完璧な人格を持っていることも、理想的な生き方を望むことも必要ではなく、ただ自己の失敗を認め赦しを願いつつ毎日忍耐強く戦うことを必要とすることだと理解することである。

「キリストの英雄たちの本当の伝記は私たちと同じなのです。彼らとて戦っては勝利を得、また戦っては敗北を喫したのです。そして敗れたときは、痛悔の心をもって再び戦

いに赴いたのです」（『知識の香』76）。自己のあり方を磨くのに、主は長い時間をかけてのたゆまぬ努力を念頭に置かれる。今列福調査が進行中の神のしもべドラ・デル・オヨの晩年、ある人が彼女に言った言葉は参考になる。「ドラ、あなたを見た人が今あなたを見たら、同じ人とは思わないでしょう」と。つまり、長年の努力の末、激しい性格の角を削り穏やかなものにする事でバランスのとれた人となるに至ったのである。この勤めを遂行するにあたって、私たちはいつも主の助けと聖母の母としての配慮に頼ることができる。「聖母はまさにこのことをして下さる。私たちが人間的にも信仰の面でも成長することをお助け下さる。また私たちに強くし、軽薄で表面的な信者のままで十分だという誘惑に一步も譲らず、責任感をもって生き、ますます高い理想に向かうことができるように助けて下さる」（フランシスコ、2013年5月6日の説教）。

次号から人格の形成に関係する様々な要素を取り扱う予定である。キリスト教的成熟のいくらかの重要な特徴を示し、聖霊が各自の協力を得て、魂の中に建てようとされる建物とはどんなものかを見る。そして、その基礎がどういう特徴を持つか、その構造が堅固になるために何をしなければならないか、ひびが入ればどういう処置を施さねばならないかを考察しよう。イエス・キリストの像を鮮明に写す人格を作るとは、なんと魅力的な挑戦であろう。

ハビエル・セセー

[Back to Contents](#)

人生の主演

「君たちをお願いしたいことは、よりよい世界を作るという任務に取り組むことです。愛する若者たち、どうか人生の解説者になるのではなく、主演になって人生を築いて下さい。イエスは世界の外から人々を観察したのではなく、その中に入って行かれました。君たちも同じようにして欲しいと思います」（教皇フランシスコ、2013年7月27日の講話）。教皇様はこのように若者たちに要求された後、すぐに問われた。「では、どこから始めようか。これを始めるように誰に頼めばよいのか。君たちと私からだ。一人一人、再び沈黙の中で、自分に尋ねるのだ。もし私から始めねばならないのなら、どこから始めようか、と。一人一人が心を開き、イエスから答えに耳を傾けよう」と。世界の歴史を動かす人になりたければ、まず私たちが自分を作り上げる必要がある。

自由と制約

自らの人生を作り上げようと主張することは、人格というものは家族や社会の環境から制約を受けるにしても、それらによって完全に決定されているというわけでないことを認めることである。生まれつきの体質や遺伝的要素から来る本能的な部分についても同じことが言える。つまり、それらは人の傾向をある程度決定するとしても、理性と意志の力でそれを修正し方向づけることができる。

私たちの人格は自由な決定をとり続けることによって鍛えられる。というのは、人が自由に行動するとき、彼の外側の世界を変えるだけでなく、本人のあり方も変えるからである。例えば、他人のものを盗む人は、他人に迷惑をかけると同時に自分を泥棒にしていく。よく働く人は、人々に役に立つことをするだけでなく、自分は勤勉な人になっていくのである。ほとんど無意識のこともあるが、人は同じ行為を繰り返すことによって一定の習慣を身につけ、現実に対して一定の態度を取るようになる。それゆえ、ほとんど反射的にする反応について、なぜそういう反応をするのかを説明するとき、「私はもともとこう言う人間だから」と言うより、「私はこのように自分を作り上げたから」と言うべきである場合が多い。

人間は多くの場合どうしようもない制約に縛られている。例えば、生まれ育った家族や社会、人の可能性を狭める病気や障害など。それらを直すことは普通は無理だが、それらに対してとる態度を変えることは可能である。なかでも神はすべてを配慮して下さることを思い出すなら。「イエスは、特に恵まれた人々にだけ向かって話しかけられたのではなく、神の広く大きな愛を証すために来られたということを絶えず繰り返して教える必要があります。人はみな神に愛され、そして神は、全ての人間から愛を待っておられるのです」（『知識の香』110）。どんな状況の中でも、たとえ大きな制約の中でさえ私たちは神と隣人に、どんなに小さなものに見えようが、愛の業を差し出すことができる。苦しみの中でのほほえみ、十字架と一致して主に捧げられた苦痛、逆境を忍耐強く受け入れること、これらがどれほどの価値を持つことか。苦しみも、孤独も、人々から忘れ去られることも、裏切りも、中傷も、肉体的精神的苦痛も、死でさえも、すべてを愛しようとする人の愛に打ち勝つことはできない。

自分の人生の作者になる

人はやる気さえあれば、自分の才能 一徳、能力、競争力 を発見し感謝し、それをできるだけよく使おうとすることができる。しかし、キリスト教的な人格を形成するのに最も大切なのは、人の最も深いところに影響を及ぼす神の賜であることを忘れてはならない。この賜の中で、神の子の身分という巨大な賜が際立っている。この賜のおかげで、父なる神はわたしたちのうちにイエスキリストの像を 一制限された仕方であるとはいえー ご覧になる。それは洗礼によって与えられ、堅信によって強められ、赦しの秘跡と、なかでも御体と御血の拝領によってますます明らかに現れる。

神から頂くこれらの賜を土台にして、望むと望まないに関わらず、一人一人が自分の存在を形づくっていく。聖ヨハネ・パウロ2世は芸術家たちとの謁見の際に「一人一人に、自分の人生の創作者になるという勤めが与えられています。自分という材料を使って、芸術品、傑作を作り上げていくのです」と語られた（1999年4月4日の講話）。私たちは自分の行いの主人である。主は「はじめに人間を造られ、人間をその意志のままに任せられた」（シラ15・14）。私たちも、もしそう望むなら、嵐や困難の中でも車のハンドルをきって進むことができる。

私たちが自由であることを意識するとき、何かしらの不安を感じることもある。失敗したらどうしよう、と。しかし、自由であることはなんといっても喜びではなからうか。「神は人間を自由な存在としてお造りになったとき、危険な冒険をされたということが出来ます。私たちが心から望んだ生き方をするように、お望みになったのです」（聖ホセマリア『信仰の豊かさ』1969年11月2日のABC紙に掲載）。この冒険の中で、私たちは一人ぼっちではない。まず神ご自身の助けがある。次に家族や友人、さらにはたまたま人生の途上で出会った人の協力もある。自分の人生の主役になるということは、多くの面で周囲に依存していることを否定する事ではない。そしてこの依存が相互であると考えたなら、私たちは互いに依存し合って生きていく存在であるということができよう。それゆえ、自由とはそれだけで足りるのではない。もし自由を偉大で壮大なことのために使わないなら、内容のない空虚なものに成り下がる。次に見るように、自由とは捧げるためにある、別の言い方をするなら、捧げられた自由というものしかないのだ。

多様な歩み方

聖ホセマリアは、スペイン内戦の直後にバレンシアの破壊された家で見つけた張り紙に書いてあった標語を少なからぬ機会に説教などで引用した。それは「旅人よ、それぞれ己が道を進め」というものである。一人一人は自分の受けた召し出しを各人独特の仕方でする。「右側でも、左側でも、ジグザグでも、歩行でも、馬に乗ってでも、どんな行き方でも構わない。神の道を行く行き方は無数にある」（聖ホセマリア、1945年2月2日の手紙、19）。一人一人が自分の聖性の劇の主役である。一人一人が、周囲の出来事に流されるままになることを拒むなら、人生のあらゆる段階で自己の存在と人格を独自の仕方ですることで作り上げていくことができる。

「重ねて言いますが、奴隷のようにではなく、自由な子として主のお示しになった道でする歩みます。自由に軽快な歩みを神の賜として味わうのです」（『神の朋友』35）。この爽やかさ、すなわち自己を支配する能力は、自分の行動に責任を持つことと、自分が神の作品であることを自覚することと切り離されない。私たちに応答を要求する無条件の愛を経験するに従って現実になっていく神に近づくという夢である。神の愛は、私たちの自由を肯定し、その恩寵によって思いも寄らない水準にまで高めてくれるのである。

神と隣人の助け

神のご計画によれば、人生は他人と分かち合うようにできている。つまり神は私たちが互いに助け合うようにお望みになった。それは日々我々が目にしている。たとえば、人が生きていくのに最も基本的なことできえ、一人ですべてできるわけではない。誰一人としてまったく他人との関わりなしに生きていくことはできない。より深いところに目をやれば、人は誰かに心を開いて、人生を共有し、愛し愛される必要を感じていることがわかる。「だれも独りで生きることはありません。だれも独りで罪を犯すのではあり

ません。だれも独りで救われるのではありません。他の人の人生は、わたしの人生の中に入り込み続けています。わたしの思い、ことば、行い、なし遂げることの中に入り込み続けています。逆にわたしの人生も他の人の人生の中に入り込みます。そして良い結果も悪い結果も生み出します」（ベネディクト16世『希望による救い』48）。

他人に心を開くというこの自然な傾きは、イエス・キリストの救いの計画において最高の働きを見せる。それが『使徒信経』で唱える「聖徒の交わりを信じます」という信仰である。それは教会の信者間の交流を指す。霊的生活においても他の人々の助けに頼らねばならない。信仰を受けたのは両親やカテキスタを通じてであるし、秘跡を受けるのも教会の奉仕者がいなければ不可能である。また信仰における兄弟から霊的な助言を受け、祈ってもらうことも必要である、など。

キリスト教生活において誰かに付き添ってもらっていることを知るのは喜びと安心をもたらすが、だからといって聖性に達するための本人の努力が免除されると考えてはいけない。聖ホセマリアは霊的生活にふれながら、「助言を受けたからと言って、本人の責任がなくなるわけではない」と言い、「霊的指導とは、人々を正しい判断基準を持ち自分で判断できる人にする事だ」と強調していた（『会見集』93）。何かの決心をするときは、たとえ助言を求めたとしても、最終的に決定するのは本人であるし、自分が下した決定の実現に傾けるべき努力を惜しんではならない。

他人の助けを必要としていることを認めると同時に、霊的生活において隣人を通して光と力を与えて下さるのは神であることを忘れてはならない。これを忘れないなら、私たちの信仰生活において頼りになる人がいない場合も、聖性への道を進み続けるのに不安を感じることはないであろう。神が私たちのそばに置いて下さった人をキリストの心を通して愛し、その助けに深く感謝するとともに、同時にその関係に縛られることなく大きな精神の自由を享受するのである。

無条件に愛する自由

キリスト信者であるわたしたちは、人格の完成が神のやさしい御旨に対して自由に全面的に答えることの結果であることを知っている。私たちが受けた賜は、神の恩寵に対して心を開くときに最も効果的に働く。それは無数の男女の聖人たちの人生を見ればおのずと明らかになる。彼らは主が自己の人生にお入りになるままにさせるとき、その奉仕のために自己を喜んで捧げることができた。聖マリアはお告げを受けたとき、「はっきりと『なれかし』とお答えになりました。これこそ神に自己を捧げる決意です。最高の自由をもつ人の返事です」（『神の朋友』25）。

人間は神を目的として生きようと決心するとき、最も価値あることに自分の夢と力を傾けることになる。そのとき自由の本当の意味を理解する。自由は単に好きなものを選ぶことではなく、自己の人生を決定的に捧げて、偉大なことのために使う能力である、と。自分の持つ才能や資質をキリストに付き従うために使うとき、他の可能性をあきらめねばならないときもあるとしても、幸せを、つまりこの世で100倍、あの世で永遠の命を手に入れる。また、そのことはその人が精神的に立派に成熟していることを示す。なぜなら、確信をもって生きることができると人格を持つ人だけが、自分のすべてを捧げることができるからだ。「だれの強制も受けず自由に、自分で望むからという理由だけで、私は神を選ぶことに決めました」と聖ホセマリアは証言している（『神の朋友』35）。

過去と現在と未来を主にお任せする

神を選択した人はいかなる逆境にもたじろがない内的な平和をもって行動する。「私は誰を信じたかを知っている」（一テモテ1・12）。これは殉教を目前にして聖パウロが表した信頼の言葉である。神を人生の土台に据えるなら、揺るぎない安心感に支えられるだけでなく、自己を隣人に捧げることが可能になる。使徒的独身の中であろうが、結婚生活の中であろうが、他のキリスト教的な行き方の中であろうが。これは現在だけで

なく過去も未来にも及ぶ献身である。「主よ、わたしの神よ、あなたのみ手に委ねます。過去も現在も未来も、大きなことも小さなことも、わずかなことも多くのことも、この世のことも永遠のことも」（『十字架の道行き』第七留、3）。

過去を変えることは誰にもできない。しかしながら、主は赦しの秘跡において罪を赦すことによって、各自の過去の出来事もきれいに再セットアップして下さる。すべては善のためとなる（ローマ8・28）。私たちが犯してしまった過ちさえも、もし神の憐れみに頼り、より神に目を向けて生きようとするなら善に変化する。こうして、信頼をもって未来を見ることが出来る。私たちが愛して下さる御父の手の中にいることを知るからだ。神の御手の中にいるなら、倒れても再び神の御手のなかで立ち上がることが出来る。

神を選ぶと言うことは、神とともに人生を作り上げていかないと招待されることである。謙遜に自由という賜をいただいたことを感謝しながら、多くの人たちと手を携えて神から任された使命を果たすために自由を使うことである。そうすれば、神のご計画は私たちの予想を遙かに超えたすばらしいものであることを経験するだろう。聖ホセマリアがある若者にこう言っていた。「神の恩寵が働くにまかせなさい。君の心が飛ぶままにさせなさい。（…）。自分について小さな夢をみなさい。困難を英雄的に克服していく夢です。神の恩寵に助けられて、それよりずっとすばらしいことが実現するでしょう」（1974年6月29日の団らん）。

ファン・ラモン・ガルシア＝モラト・ソト

[Back to Contents](#)

正しい自己愛（適切に自分を大切にすること）

「あなたがたが（…）贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、傷や汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」（一ペトロ1・18-19）。こう言って聖ペトロは初代教会の信者たちにどれほどの価値を持っているかを思い出させている。それは、主に無限に愛され、贖われたということに示される。キリストはわたしたちを無償で神の子にすることによって、自信をもって生きることができるようにしてくれる。ある学生が聖ホセマリアした打ち明け話がそれを示す。「あの青年は今頃どうしているだろう。よく勉強するあのセントラルの大学生は話してくれた。『神父様が教えて下さったので、「私は神の子なのだ」ということを考えていましたが、ふと気がつくと「神の子だ」と、誇りを心に〈胸を張り、堂々と〉道を歩いているのでした』わたしは自信をもってその誇りを育てるよう勧めた」（『道』274）。

人間の偉大さを知る

ここで言う「誇りを育てる」とは、どう理解すればよいのだろうか。もちろん、自分になり徳を持っているかのように自惚れることでも、遅かれ早かれ苦い失敗に終わる根拠のない自信過剰に陥ることでもない。それは人間であることがどれほど偉大かを知ることにある。なぜなら人間は、「そのもの自体のために神が望んだ地上における唯一の被造物」であるからだ（第二バチカン公会議『現代世界憲章』24）。人は神の似姿に造られ、恩寵の助けによってキリストとますます一致していくことによって、その似姿を完成させるよう召されている存在なのだ。

この崇高な召し出しが、キリスト教の信仰の一部である、自分を正しく愛することを理由付ける。信仰の光によって、私たちは各自の成功と失敗を正しく評価できる。自分の真の姿を冷静に受け止めるなら、この世界でいかにあるべきでいかに行動すべきかがわかる。その上、自分に自信を持つことができ、余計な恐れや落ち着きのなさや優柔不断などに流されることなく、隣人に対し開かれた態度をとり、新しい状況に適応し、楽観的見方と喜びを増すことができる。

自分を肯定的に評価するか、否定的に評価するかは、自己認識と、各自が立てる目標をどれほど達成できるかにかかっている。この目標は、なりたいとあこがれる人物像、例えば、家庭で受けた教育や友達のコメント、世間で広がっている理想像などを通じて具体的に示される理想の人物像をもとにして描かれる。それゆえ、各自が何を気にしながら生きているかをはっきりさせることは重要である。なぜならそれらが高くて品位のあるものなら、よい自尊心を持つことができるだろうから。我々の文化が示す理想像は多かれ少なかれ我々の自己評価に影響を与えるので、人々がどんな人物像にあこがれているかを知っておくべきである。

モデルになる人物像を探すこと

誤った成功の概念に取り付かれると、自分についてゆがんだ判断を下すということがあ。例えば、何が何でも仕事上の成果をあげることに、自己中心的な愛情関係を築くこと、快樂主義にどっぷり浸かった生活を送ることなどを成功と見なすときである。人から褒めてもらえるような、いくらかの成功を勝ち得たとき、自己を過大評価することが

ある。また逆に、目標を達成できなかったとき、あるいは他人から評価をされなかったと感じるとき、自己を過小評価することもある。これらの誤った自己評価は、大部分、どんな業績をあげたか、どんな物を持っているかなどで個人の価値を計る人々の意見を気にしすぎた結果である。

このような危険を避けるためには、私たちが仕事や家族や社会の中でいつも何を気にしているか、またそれらがキリスト教的価値観に合っているかどうかを検討する価値がある。また、わたしたちは最も完全に首尾一貫したモデルはイエス・キリストであることを知っている。私たちの人生をイエスの人生に照らし合わせて見ることが、自分を評価する最良の方法である。というのは、イエスは、友達になれる気さくで身近な模範であるから。

神の光で自己を認識する

自分を正しく判断するためには、自分をよく知ることが不可欠である。この作業は複雑で、ある意味で死ぬまで続く訓練が必要である。まず、100%主観的な物の見方ー私の判断、私の意見、私の感じーを克服し他人の意見を考慮に入れる必要がある。私たちは自分の声や外見を知るためには録音や鏡を使わねばならないが、もしそうであるなら、自分がどんな人間であるかを評価するため私たち自身は最良の判定者ではないことを認めるのは、絶対に必要であろう。

自己について反省することの他に、他人の意見に耳を傾けることは役に立つ。このことは、私たちに助言を与えることのできる人たちに心を開き、その意見を聞き、自分の理想に照らし合わせて吟味することによって達成できる。この意味で霊的指導はとても役に立つ手段である。また、わたしたちは、周囲にいる人たちや社会の流行や習慣からも大いに影響を受ける。つまり、ものごとを深く考える雰囲気の中で生活しているなら、内省をすることがたやすくなる。反対に、軽薄な生活スタイルをもつ社会なら内省の進歩は困難になるのだ。

そのため自己を反省し、神が自分をどのようにご覧になっているかを考える習性を養うことがよい。念祷はそのために打ってつけの時である。なぜなら、念祷の中で私たちは神を知ると同時に、神の光で自分を知るからである。なかでも他人の助言やコメントを理解できるよう努めよう。時には、他の人の判断があまり客観的ではなく、ひょっとしたら深く考えずになされた、とくに神の御旨とは相容れない基準に従ってなされたと感じた場合には、その判断を却下せねばならない。誰に助言を頼むかを判別するのは大切だ。「賢者の叱責を聞くのは、愚者の賛美を聞くのにまさる」(コヘレト7・5)。

他方、私たちは、周囲の人の自己評価についてもそれなりの影響を与える。そのため、私たちの言葉は、誰もが「神の子」の尊厳を持っていることを認めた上で発せられるよう注意せねばならない。特に、責任ある地位や指導の任(子供を指導する親、生徒に対する教師など)についているなら、助言や示唆によって、または明確な言葉で矯正せねばならないときさえ、人に各自がもつ価値を発見するのを手助けすることができる。これが、人が自信を持って成長できるための出発点であり、この考えに支えられれば人は希望をもって自分で成長することができるようになる。

あるがままの自分を受け入れる。主は私たちの全体を愛しておられる。

神の光に照らして自分を見るなら、あるがままの自分を受け入れることができるだろう。それは徳も才能もあるが同時に欠点もある存在で、後者は謙遜に認めなければならない。自分を正確に評価することは、人は皆それぞれ異なっていること、そのため私より賢い人、楽器の演奏が上手な人、より運動のできる人などがいることを認めることである。誰もがよい資質を持っており、それを伸ばすことができる。しかし何よりも重要なことは誰もが神の子であるということである。この事実を認めることによって、掛け値なしに自己を受け入れることができるようになる。不必要に他人と自分を比較して落胆に

することなどせずに、神と隣人に仕えたいと願うキリスト信者が持つべきポジティブな自己愛は、人間がみな神の子であることを認めることを土台としている。

要するに、もし神が私たちの欠点をも愛しておられることを思い出すなら、私たちは自分を受け入れることができる。欠点は私たちの聖化の道の一部である。主が最初にお選びになった12人の使徒も、わたしたちとそれほど違った人たちではなかった。彼らは「弱さを持ち、実行よりも口数の多い、月並みの人々でした。しかし、人を漁るものとするために（マタイ4・9参照）、ともに世の救済者・神の恩恵を司る者とするために、そのような彼らをイエスは召されたのです」（『知識の香』2）。

成功と失敗を前にして

このように超自然的な見方をすると、私たちの人柄とこれまでの人生がより深く考察され、その意味を全体的に捉えることができる。永遠から物事を見るので、この世での出来事や個人の業績を相対化できる。何かの成功に喜ぶことがあるなら、そのことが聖性において成長することに役立ったかどうかこそ最も重要なことだと思い出す。このように振る舞う人は、キリスト教的な現実主義者にして、人間的にも超自然的にも成熟した人で、成功や賞賛によってのぼせ上がらないのと同じように、失敗を前にしても悲観主義に引きずられることはない。聖ペトロとともに善い業をなしたなら、それは「ナザレのイエス・キリストの御名によって」なしたとすることができる。

同時に、外的な困難や個人の不完全さのために思うような成功を勝ち取るのが容易ではないことを認めることも、正しい自負心を形成し、人間的に成熟し、学ぼうとする意欲をもつために役に立つ。人は自分の欠陥を認め、失敗から積極的な教訓を引き出すという態度によってのみ学ぶ姿勢をもつことができる。「失敗したというのか。そうではない、私たちは決して失敗しないのだ。あなたは全幅の信頼を神に寄せたし、そのうえ打てる手はみんな打った。確信しなさい、今その失敗こそ実は成功なのだ。神に感謝しなさい。それから、もう一度やり直すのだ」（『道』404）。私たちはこうして十字架の道を歩み始める出発点に立つ。十字架の道は、弱さの中での強さ、惨めさの中での偉大さ、屈辱の中での成長という逆説がこの上ない効果を発揮することを教える。

自信をもって働き、自己を正すことを恐れない。

人が自信をもって行動することができるのは、自分の成功を確信しているときというより、自分が神に愛されている子であることを知るときである。なぜなら成功の確信はしばしば裏切るからである。本当の自信を持っていれば、どんな決心にも伴う失敗したらどうしようという心配を抑え、不安によって縮こまるようなことがなく、新しいことに勇敢に挑戦する態度を保つことが可能になる。「分別とは、決してまちがいを犯さないことではなく、自分の誤りを正す態度のことです。問題を避けるという楽な方法をとるよりも、むしろ度重なる不手際をも意に介さず、的確な判断を求める努力をする、このような人こそ分別ある人と言えるのです。何かに取り付かれたかのように大慌てで仕事をしたり、おどおどしながら働いたりはしない。決心した結果、困難が襲ってくるかもしれないが、その責任は自分で負う。的外れなことになるのを恐れて善獲得のための努力をやめることもない」（『神の朋友』88）。

自己の限界を知った上で失敗から学ぼうとするならば、過ちを正すことによって、自己を改善し成長することができる。それは、次は周囲のものや人にもよい影響を与え、自己と周囲への信頼を増すことにもつながる。天の父の手に自己を委ねる人は自信に支えられる。というのは、「神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるようにともに働く」（ローマ8・28）からで、罪を犯したときですら、主に赦しを願いその恩寵によって再度立ち上がるなら、謙遜の徳を増すことになる。このように自らを改めることは、改心のプロセスの一部を形成する。「自分に罪がないと言うなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にはありません。自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めて下さいます」（一ヨハネ1・8-9）。

不可欠の徳である謙遜

つまるところ、自負心は謙遜の中で成長する。「謙遜の徳こそ、人間の惨めさと偉大さを同時に教えてくれる徳」（『神の朋友』94）だから。もしこの徳がなければ、しばしば自尊心が問題を起こすことになる。しかし、謙遜が培われると、現実的な見方ができ、正しく自己を評価する。つまり、わたしたちは欠点のない人間ではないが、腐敗しきった人間でもない。わたしたちは神の子であって、惨めさの上に思いも寄らなかった尊厳を持っているのだ。

謙遜によって自分があるがままに知ることができ、恥ずかしがらずに他人の助けを求め、また他人に助けの手を差し出すようになる。畢竟わたしたちは誰でも神を必要としている。神はわたしたちの憐れみ深い父で、絶えずわたしたちを見守って下さる。わたしたちは「神の中に生き、動き、存在する」からだ（使徒言行録17・28）。聖マリアの人生には、どれほどの自信と信頼が見られたことか。「力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く」（ルカ1・49）とすることができたのは、それは自分が「身分の低い、この主のはしため」（ルカ1・48）であると自覚して生きていたからだ。聖母においては、謙遜の徳と自らの召し出しの偉大さが靈妙な仕方で混ざり合っている。

ハビエル・カバニェス・トルフィーノ

[Back to Contents](#)

徳の涵養による性格形成

「イエスが外に出ようとされると、ある人が走りより、イエスの前にひざまずいて尋ねた。『善い先生、永遠の命を受け継ぐためには、何をすればよいのでしょうか』」（マルコ10・17）。わたしたちも主の弟子として使徒たちとともにその場にいたなら、主の答えに驚いたかも知れません。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに善い者はいない」（マルコ10・18）。イエスは質問に直接答えることを避けるかのようです。少し神妙な教え方で、あの青年が感じていた気高い望みの底にある究極の意味に注意を向けさせます。「イエスは、その青年の質問が実に宗教的な質問であり、人間を引きつけると同時に人間に義務を負わせる善は、神に源を発し、まさに神自身であることを示されます。神だけが、『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして』（マタイ22・37）愛されるにふさわしい方なのです」（聖ヨハネ・パウロ2世『真理の輝き』9）。

永遠の生命に入るために

主はすぐにあの大胆な質問に戻り、しなければならぬことを教えられます。「もし命に入りたなら、掟を守りなさい」（マタイ19・17）と。福音書によれば、あの青年は信心深いユダヤ人でしたので、この答えに満足して帰って行ってもおかしくなかったでしょう。先生は彼が小さいときから守ってきた掟を答えとして示され、彼の確信にお墨付きを与えられたわけですから。しかし、青年は権威をもって教えられる新進気鋭のラビの口から聞きたいと思いました。この方なら思いも寄らぬ展望を見せて下さるだろうと直感的に見抜いていました。そして尋ねます。「どの掟を」（マタイ19・18）と。イエスは隣人に対する義務を列挙されます。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証してはならない。父母を敬いなさい。また、臨時を自分のように愛しなさい」（マタイ19・18-19）。それらは、いわゆる十戒の第二の板に書かれた掟で、「その善を守ることによって、神の似姿である人間の善」（『真理の輝き』13）を守るものです。聖アウグスティヌスによれば、それらは第一段階というべきもの、つまり真の自由という目的地に向かう道であって、完全な自由を構成するものではありません。別の言い方をすれば、それらは愛の道における初期の段階ですが、まだ成熟し完成された愛ではないのです。

まだ何が足りませんか。

青年はこれらの掟を知り守っていました。しかし、心の中でまだ何かできることがあると感じていました。イエスはその心をお読みになります。「イエスは彼を見つめ、愛情を込めて」（マルコ10・21）、挑発的な言葉を投げかけられました。「あなたに欠けていることが一つある。行って、持っているものをことごとく売り、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を蓄えることになる」（同）と。イエス・キリストは、青年の心中に隠れていたよい人間になりたいという気高い望みを彼の前にお現しになりました。青年が先生の要求をどこまで理解したかはわかりませんが、「まだ何が足りませんか」という質問を見ると、するべきことがまだ他にあると薄々気づいていたと思われる。彼はよい心構えを持っていました。ただ、神の掟にはもっと深い意味があることには気づいていなかったかもしれません。

神がわたしたちに望まれる生活とは、ただよい業をすることにあるのではなく、良い人、徳のある人になることにあるのです。聖ホセマリアが正しく言っていたように、「並の善い人」になるのではなく、イエスがわたしたちの目の前に示されるこの上ない展望——「ただお一人の善い方」（マタイ19・17）——に見合った善い人になることなのです。

キリスト教的意味で成熟した人とは、自分の人生を自分で作り上げるため、神に何がまだ足りないかを心から尋ねる人のことです。ただ掟さえ守っていればよいという気楽な態度から抜け出し、個人的な欠点を持ちながらもイエスに付き従うことが大切さだということを見出す人です。そうするならば、イエスの教えによってわたしたちの価値観は一変するでしょう。以前は臆病でちっぽけだった心は、神が与えて下さった自由によって大きく広がるように感じるでしょう。「わたしはあなたの戒めの道を走ります、あなたはわたしの心を広くしてくださいました」（詩編118 [119]・32）。

人格形成という挑戦

青年は「足りないこと」が、ただ掟を守る人が閉じこもる安楽な住処を出て、神と人々のため自分の人生を捧げることであったと予想していませんでした。そして悲しそうに去って行きます。この悲しみは、突然現れた神に自分を任せる代わりに、自分の考えにしがみついて生きようとする人にはいつも起こることです。神は、神の自由をもって生きるように人間をお呼びになります。「キリストはわたしたちが自由であるようにと、私たちに自由にして下さったのです」（ガラテヤ5・1）。そして、つまるところ、わたしたちの心はそれに達しない中途半端な態度には満足できないのです。

成熟するとは高い理想に従った生き方を学ぶことです。若干の掟を知ることとか、他人に迷惑をかけない生活をするとかで満足することではありません。善い人、つまり聖人になろうと決意するとは、キリストと一致し、キリストが提示する生き方のすばらしさを発見することです。ですから、道徳の掟が何のためかを知ることが求められます。それらの掟は、どんな善を希求しなければならないか、完全な人格に達するためにはどのように生きる必要があるかを教えてくれるからです。この目標が達成できるために、キリスト教的な諸徳を自分のものとする必要があるのです。

人格形成を支える柱

道徳の掟を知ると言うことは、抽象的な論理を展開することでも、または技術を身につけることでもありません。良心を形成するには堅固な性格を育てることが要求されますが、その堅固な性格を支える柱のようなものが徳なのです。徳は人格の土台を作り、安定させ、平衡を保たせます。わたしたちが自己中心主義から出て、外の世界、つまり神と隣人に心を向かわせるように導きます。徳のある人は、困難を克服できる人、何事にも中庸を保つ人、正しく、高潔で、一本筋が通った人です。反対に、徳のない人は、壮大なプロジェクトを志すことも、大きな理想を実現することもなかなかできません。その生き方は、場当たりの絶えず左右にぶれ、他人から信頼を得ることも、自分自身を信頼することも難しい。

徳を涵養するなら、人はより自由になります。徳とは、慣れや惰性とはまったく異なるものです。言うまでもないことですが、よい習性、つまり徳がわたしたちに根付き、よい行いをより容易にできるようになるためには、一度だけよい行いをすれば足りるわけではありません。何度も続けて同じ行為を繰り返すことによって、それらの習性が身についていくのです。つまり、善いことをしながら善い人間になるのです。たとえば、決まった時間に勉強を始めるという決心を繰り返し実行するなら、二度目は一度目よりも、三度目は二度目よりもより簡単にできるようになります。そうは言っても、勉強をするという習性を維持するためにはその決心に踏みとどまらねばなりません。でなければ、その習性は早晚失われるでしょう。

心を新たにする

人間徳も超自然徳も、わたしたちを善に、すなわち人の望みを満たしてくれるものに向けてくれます。わたしたちが本当の幸せ、すなわち神との一致に到達するように助けてくれるのです。「永遠の命とは、唯一のまことの神であるあなたを知り、また、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ることです」（ヨハネ17・3）。徳を持てば、道徳的掟に従って生きることが簡単になります。なぜなら、掟を守るべき規則としてだけ見るのではなく、キリスト教的完成に導く道として見るからです。キリスト教的完成とは至福八端を生きることによってイエス・キリストと一致することですが、至福八端とはイエスの生き方そのもので、「生活における基本的な態度と心構えについて語っています」（『真理の輝き』16）。それは人を永遠の命に導くものです。

こうなると、聖パウロの次の言葉のように、キリスト教生活に成長する道が開かれます。「心を新たに、生まれ変わり、何が神のみ旨が、すなわち、何が善であり、神に喜ばれ、また完全なことであるかを弁えるようになりなさい」（ローマ12・2）。恩寵によって、わたしたちは様々な出来事を今までとは違った仕方で行動するための基準を持つようになります。物事を、道徳法にも現れる神の御旨に照らして見ることを学び、そうして徐々に聖なる生活を愛し、善いもの、心地よく完全なものを愛するようになります。こうして、キリスト教的意味での道徳的かつ情緒的成熟に達し、その結果、真に高貴で、真実で、正しく美しいものを評価し、神の子の尊厳を損なう罪を斥けるのが容易になります。

この道を歩むと、聖ホセマリアが言っていた「分別の人」（聖ホセマリア、『道』、「著者より」）ができあがります。しかし、この分別とはどういうものでしょうか。聖ホセマリアはこう付け加えています。「分別は成熟さ、確信の揺るぎなさ、教えについての十分な知識、精神の細やかさ、強い意志を含みます」（『会見集』93）と。この言葉は、あるべきキリスト教的人格者の姿を見事に描いていると言えるでしょう。それは、自由に決定を下し、その決心を自分のものとする、すなわち、自分の下した決定に責任を持つことができる成熟した人のことです。形成の手段や、読書や反省を通じて、また特に「人生のまことの星と言える、正しく生きることのできた人々」（ベネディクト16世『希望による救い』49）の模範によって得た、キリスト教の教えの深い知識に裏打ちされたしっかりした確信を持つ人です。これらの特徴は、隣人に対する優しさに現れる精神の繊細さと、有徳の生活に現れる強い意志と連動します。それゆえ、分別の人は、様々な状況の中で、神は私に何を望みだろうかと自問することができます。聖霊に光を頼み、身につけた原則を見直し、自分に助言を与えることのできる人に助けを求め、首尾一貫した行動をとることができるのです。

愛の実り

このように考えると、正しい道徳生活とは一徳によって掟を生きることにより具体化される一善を求め善に成長するようにさせる愛の実りであると言えます。このような愛は、その本性上、流されやすく不確かな感情を超えます。つまり、愛はその時々にしたことや各瞬間の気分によって左右されません。愛するということは、むしろ自己を与えることを前提とします。神に愛されていることを知り、自由を賭けるねうちがある大きな理想のために、喜んで自分を捧げるのです。「自由に献身し、自分をささげるとき、その自由な行為は愛を新たにします。そして献身を新たにすると、若さと寛大さを失わず、大きな理想をもちつづけ、大きな犠牲を払う力を維持することです」（『神の朋友』31）。

キリスト教的な完成とは、いくらかの掟を守ることや、自己抑制ができる人や効果的な仕事ができる人になるというような部分的な才能を伸ばすことに限られることではありません。むしろ、神に自己の自由を捧げること、「来て、私に従いなさい」という招きに神の助けによって応えるように後押しします。愛に動かされ聖霊に従って生き、隣人に仕えたいと望み、神の掟とは、自分が進んで選んだこの愛を生きるためのこれ以上ない道であることを理解することです。いくらかの規則を守ることではなく、イエスについて行くこと、つまり御父の御旨に喜んで従いながら、イエスと人生を共有することです。

完全主義者とは異なる

徳において成熟しようと努力することは、自分に陶醉するナルシスト的な態度とは似ても似つかぬものです。わたしたちは父なる神への愛のために努力します。わたしたちが見つめるのは、自分自身ではなく、神です。そのため、完全主義への傾向をきっぱりと拒む必要があります。その誤った傾向に陥るのは、内的な戦いを効果や精緻さや成果といった基準だけで計るときです。それらの基準は、仕事の世界でよくもてはやされているにしても、キリスト教的道徳生活をゆがめてしまうものです。聖性とは何よりも神を愛することにあるからです。

実際、成熟した人は、わたしたち自身と隣人のなかに見られる否定できない限界と、よく働きたいという望みを適切に調和させます。時に聖パウロとともにこう叫びたくなる時があるでしょう。「わたしは自分の行っていることが分かりません。なぜなら、自分が望んでいることはせず、かえって憎んでいることをしているからです。（…）わたしは何とみじめな人間でしょう。死に定められたこの体から、誰がわたしを救い出してくださいませんか」（ローマ7・15、24）。たとえそのような状況に陥っても平和を失うことはないでしょう。なぜなら、神が、聖パウロに対してと同じようにわたしたちにも「お前はわたしの恵みで十分だ」（二コリント12・9）と仰るからです。そうなる、わたしたちは感謝と希望に満たされます。わたしたちが自分の限界を見ることによって改心し、主に寄りすがろうとするなら、主はそのネガティブな面も利用されるからです。

ここで再び、イエスが青年に言われた「善い方はただおひとりである」（マタイ19・17）ということに寄る辺を見つけます。神の子らは善いお方に助けられて生きている。神がわたしたちに力を下さり、本当に価値のあるものに全人生を向けさせ、何が善いもので、何を愛すべきかを理解させて下さり、神から受けた使命を果たすために自分を捧げることを可能にして下さるのです。

ホセ・マリア・バリオ・マエストレ

ロドルフォ・バルデス

[Back to Contents](#)

心の整理整頓

聖アウグスティヌスが晩年に「あらゆるものの平和は秩序の静けさである」（『神の国』XIX、13、1）と書いたとき、長年膨大な仕事に追われていた自分の経験に基づいていた。自己に任せられた神の民を牧者として導く仕事、膨大な説教、古代の社会と文化が崩れいく激動の時代の挑戦を受けて立つことなどである。この言葉は、日々の喧噪とは無縁の静かな瞑想の中で書かれた金言ではなく、予断を許さない変動を生きる中で書かれたのである。この聖人の確固たる人格は日々の努力の結晶であった。一日一日を「目標に到達しよう」と努力を続けることによって、自己の性格をますます堅固にしていったのである。

成熟した人がもつ特徴の一つは、多くの活動に従事しながら心の平和と秩序を保つことである。この平衡感覚を持つには、並々ならぬ努力を必要とする。聖ホセマリアもこの点について触れている。ある人が忙しくて自分の形成に気を配ることができないと話したときこう言っている。「あなたが私の状況を知ったなら。私もまた二足以上のわらじを履いています。この無秩序の上に、秩序を打ち立てねばならないのです」と。秩序だった生活をするには、日々の戦いで獲得していく戦利品と言えよう。「快くはないが急を要する仕事から始めること、（…）あまりにもあっさり放置しがちな任務を遂行するための忍耐、今日すべきことを翌日まで延ばさないなど、すべては父なる神に喜んでいただくためです」（『神の朋友』67）。

克己（自己を律する）

この静かな戦いは身の回りにある物品や日々の所用だけでなく、私たちの心そのものの態度とも関係がある。このように自覚した心がなければ、秩序は単に時間をよく活用することや効果的な働き方をすることになるだけで、真のキリスト教的成熟を示すものではなくなる。キリスト信者の確固たる人格とは、考えから行いに、また行いから考えへの絶えざる行き来の上に建てられ、自己を支配することによって、外的活動を秩序づけようとすることによって、また内的な潜心と賢慮によって成長する。

この内的調和を得るのを妨げる障害もすぐ目に入ってくる。頭で信仰に従った生活はすばらしいと悟ったとしても、その邪魔になる様々な傾向、時には正反対の傾向を感じるだろう。聖パウロはこう叫んでいる「善をなそうと思う自分には、いつも悪がつきまわっているという法則に気づきます。『内なる人』としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、私を五体の内にある罪の法則のとりこにしているのがわかります」（ローマ7・21-23）。私たちはしたいこととせねばならぬこととの間で分裂しているように感じ、時には目が曇ってはっきり見えなくなる。そうすると、ともかく少しぐらい道を逸れてもかまわないではないかと思うことすらある。それは本当のところは愛が揺らいでいる状態なのだが。

しかし、我らの主がナタナエルに言われた褒め言葉が思い出される。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い」（ヨハネ1・47）。良心の中で響く神の声に従って生きようとする人には自ずと敬意を感じてしまう。首尾一貫している人は、彼らのすべてが本物だから、それを見る人を引きつけずにはおられない。反対に、裏表のある生活、埋め合わせ（たとえ非常に些細なものでも）を求める生活、正直さに欠ける

生活、これらは魂を曇らせる。わたしたちは皆これらの小さな逸脱の危険にさらされているので、心がけるべきことは正直に逸脱を認め、そのたびに道に戻ろうとすることである。そうすれば、人生の荒海の中で、舵を失った船のように波風に翻弄されるという危険を免れることができよう。

神の望まれるポリフォニー

内面に秩序をもたらすとは、知性が想像力を「支配し」、感情や好みをコントロールするだけで十分ではない。知性の同伴者ともいえる感情や想像力といった能力がどのように、またどこまで働くのかをよく知る必要がある。たとえを用いるなら、神は知性だけが歌う独唱でなく、想像力や感情や情緒などの声部からなる多声部合唱を望まれている。このポリフォニーに不協和音が生じた場合、そのなかの一つの声部を消すことで修正するのではない。昔から節制の徳として知られた克己は、感情などを押し殺して知性だけが支配する冷たい知性中心主義ではないのである。神は私たちが「大きくて強い心、若々しくてやさしく繊細な心」（『神の朋友』177）を持つことをお望みなのだ。

そういう心をもって初めて主がお喜びになる合唱をすることができる。もしきれいな合唱にしたいなら、音程を合わせねばならない。つまり、情緒を教育し、真実に善い物や美しい物に感じ入る感受性を培うことである。感情は私たちの生命に彩りを与え、周囲に起こる出来事をよい豊かに感じ取ることを可能にしてくれる。しかしながら、けばけばしい色を塗り立てた絵が不快であるのと同じように、あるいは調律されていない楽器が不愉快な音を立てるように、感情に流されるままの心は人格の調和を破壊し、ときに荒々しく隣人との関係を損なう。

聖ホセマリアは心を「七つのかんぬき」で閉じるように勧めていた（『道』161、188）。あるときこう説明している。「私が勧めるように、心を七つのかんぬきで閉じなさい。それぞれが七つの罪源の一つ一つのためです。しかし、心を捨て去ることはないようにしなさい」（1974年6月30日、サンチアゴ・デ・チリでの団らん）。何世紀にもわたる人類の経験によって、非キリスト教文化圏の人々も、感情と本能が野放しになれば、氾濫した流れのように私たちを翻弄し、行く先々で破壊行為を働くことがわかっている。流れを食い止めるのではなく、山々から流れ出る水をまとめ導きタービンを回して発電するように装置を整える土木技師のようにするのだ。木々や建物を根こそぎにしたかもしれない流れを別の水路に導くなら、みんな安心して暮らし、その電気を利用して光や熱を得ることができるようになる。もしこれと同じように人間本性にある本能と感情を安定した形で制御できなければ、心に平和も安心もなく内的生活などは夢物語となる。

日々の生活を整える

私たち自身の主人となるための重要な一歩が、怠け心に打ち勝つことである。怠け心は、目立たないが強いウイルスのようなもので、それをほったらかしにするならゆっくりと私たちを無気力な人間にしてしまう。怠け心は、はっきりした目標を持たない人間において、あるいはそれを持つがその方向に進もうとしない人間において、どんどん大きくなる。「決定あるいは検討を遅らせることや怠惰や怠慢が、落ち着きであるかのような思い違いをしてはならない。落ち着きは常に、懸案事項を遅滞なく検討し、解決するために必要な勤勉の徳によって補われ、完成される」（『鍛』467）。注意を払わねばならないことに頭を使うこと、少し努力を要求することから逃げないようにすること、今できることを後にのばさないこと、これらの習性を身につければ、てきぱきと働く堅固で落ち着いた人格を築くことができる。

他方でもう一方の極端にも注意しなければならない。「子よ、あまり多くの事に手を出すな。何もかもしようとすれば、ひどい目にあう。やり遂げようとしても、果たすことはできず、逃げようとしても、逃げきれものではない」（シラ11・10）。成熟した人格とは、ここでは秩序正しい活動を遂行する思慮深さを意味する。生活が雑多な仕事に振り回されないようにするため、すべきことを適切な時間に配分すること、つまり、

過度の厳格さを避けながら、計画に従ってその時その時にすべきことを、突然したくなることに優先させる努力が役に立つ。このようにすれば、目の前のことで頭がいっぱいになって重要なことを忘れるような事態を避けられる。もちろん、すべてを計画するには及ばない。しかし、次々と起こる問題に翻弄されて一日を過ごし結局時間を無駄にしてしまうことは避けねばならない。そういった意味で聖ホセマリアは「私たちは一度にすべてのことをする時間がないので、計画を立てることが必要だ」と言う。

一日の中にあらかじめ時間を決めておくべき大切な時がいくらかある。例えば就寝の時、起床の時、神とだけ過ごす時、仕事の時、食事の時など。これらの他は、やるべきことをよく果たす、つまり結果を出すように、心を込めて完全に果たす、一言で言うなら愛によって果たすための時間である。「各瞬間の小さな義務を果たせ。なすべきことを果たし、また、していることに没頭せよ」（『道』815）。要するに、これが聖性のプログラムである。それは四角四面で窮屈なものではない。なぜなら、そうする目的は、神と隣人に仕えるという大きなものだからだ。敢えて一定の計画に縛られるのは愛のためであるが、同じ愛のために隣人の必要を鑑みて、必要な時はその計画を変更する。神の御前で生きようとする人には、いつそうすべきかがはっきりとわかる。

内的な空間を育てる

人の内部の精神世界は、その人に力を与え生き生きとさせる核のようなものであり、それのおかげで人の活力と資質と心構えと行動が一つにまとめられる。自分の内的世界をもち、魂の諸々の能力を統一し、それらを落ち着かせることができる人は、より豊かなパーソナリティを育むことができる。なぜなら、その人は隣人と意味のある会話ができ、その結果より深い関係を結ぶことができるからだ。ベネディクト16世は言われる。「沈黙はコミュニケーションに欠かせない要素です。沈黙がなければ、豊かで内容を伴うことばは存在しえません」（世界広報の日のメッセージ、2012年5月13日）。

空虚で薄っぺらな生活に甘んじないためには、自分に起こる出来事、自分が読んだこと、人から言われたこと、そしてなによりも神から受けた光について考える時間を持たねばならない。内省するということは、自己の内部の空間を広げることである。つまり、仕事や人間関係や休息など、生活の様々な側面を一つにまとめ、主に助けられキリスト教的生活を送ることを可能にしてくれる。内省の習慣は、私たちが軽薄さや忍耐の不足や注意散漫に陥ることを避けさせ、そっと魂の内部に入り込むことを教えてくれる。こうして、神の御前で黙想をするために必要な落ち着きが得られる。「私たちはみな、夜一日を終える前に、一人になって次のように自問すべきです。今日は私は何を考えたのか。私に何が起こったのか。私の心にどんな考えが浮かんだのか、と」（フランシスコ、2014年10月10日の講話）

この精神の落ち着きは、目の前の問題だけに没頭することをやめ、懸案問題に注意を向け、想像力をコントロールするときを得られる。つまり、外の世界に釘付けになっている目を閉じ、外面的にも内面的にも沈黙するときである。このようにすると、様々なものを眺め、驚き、精神的善を味わい、神に耳を傾けることを学ぶ。その結果、私たちの知識と経験は深みを持つようになる。この内的な豊かさをもつなら、社会に出て行くとき、隣人との付き合いをより楽しむことができる。というのは、他人に差し出す価値のある何かを、私にしか与えることのできない何かを持つからである。

沈黙の中で、人は神の声を聞くことができる。神がホレブの山で預言者エリアの前を通り過ぎられたとき、聖書によれば、岩を砕くような嵐の中にも、地震の轟きの中にも、火の中にもおられず、ほとんど気づかれないようなそよ風の中におられた（列王記上19・11-13）。沈黙するということはすばらしいことだ。沈黙は空虚とは全く異なるもので、それが神との親密な会話を可能にするとき、本当に充実した活動となる。「一条の沈黙の音色。愛に固有な沈黙の音色とともに主は近づかれます」（フランシスコ、2013年12月12日の説教）。

心の知恵

「心に知恵ある人は聡明な人と呼ばれる」（箴言16・21）。心を静めることができるなら、わたしたちの行動の理由をよりはっきり意識することができるようになる。確固たる人格が成熟するのは、ちょうど果実が太陽に照らされて熟するようであり、熟した人格には正しい判断を下す知恵が果汁のように注がれる。

問題が起こるといつも即座に回答を与えなければならないわけではない。知恵ある人は、しばしば判断や決定を下す前に、しっかりとデータを集めるよう努める。なぜなら、物事の真の姿は最初に受ける印象とは異なることが多いからである。成熟した人の特徴は、注意深く問題を検討し、過去に経験した類似のケースを思いだし、助言を与えることのできるような人に相談することである。そしてなによりもまずキリスト信者にとって自然なことは、神に助言を願うことである。「何を決めるにしても、いつも、神のみ前でゆっくりと考えてからにしよう」（『道』266番）。こうすれば、軽薄さや横着さに陥ることことも、過去の経験や周囲の雰囲気につきずられることもなく、個々の状況で賢明な判断を下すことができる。ある決定を下す勇気 –たとえその決定が危険を伴うものであっても– と、その決定を即座に実行に移す勇気を持ち、万一あとで決定が間違っていたとわかったときは、それを改める心構えをもつことができる。

内面を深めた結果であるキリスト教徒の確固たる人格は、一つの理想に人生を賭け、それに堅忍することを可能にしてくれる。「私自身にかかわるすべてを放棄するため、恩寵をお恵みください。私は御身の栄光、つまり御身の愛以外のことを心配すべきでないからです。すべては愛なる御方のために」（『鍛』247番）。

ホセ・ベニト・カバニーニャ・マヒデ

カルロス・アイセラ

[Back to Contents](#)

人を成熟させる対話

「陶工の器が、かまどの火で吟味されるように、人間は議論によって試される。樹木の手入れは実を見れば明らかなように、心の思いは話を聞けばわかる」（シラ27・5-6）。成熟した人の確かなしるしの一つが、人と内容のある会話ができる能力である。それは、他人に対してオープンな態度をもつことで、暖かい付き合いと人から学びたいという誠実な望みに現れる。

「他の人や別の文化を知ることは、いつも大いに役に立つことで、それによって私たちは成長します。（…）。対話は人が成熟するためにとっても大切です。というのは、他の人とつきあうことによって、また他文化と接触することによって、さらに他の宗教を知ることによってさえ、私たちは成長し、成熟するからです。なるほど、そこには危険もあります。誰かと対話をして、心を閉ざし腹を立てることがあるなら、喧嘩になるかも知れません。争いに陥る危険がありますが、これはいけません。なぜなら、対話をするのは人と出会うためであって、喧嘩をするためではないからです。では、対話をして喧嘩をしないためには、どういう心構えをもつべきでしょうか。柔和になることです。柔和とは冷静に他の人や文化を受け入れる能力です。またそれは知性的な質問をする能力でもあります。『君はどうしてそう考えるの』、『この文化はどうしてこうなの』と。相手の言うことに耳を傾けて、それからこちらが話すのです。最初に聞くこと、次に話すことです」（フランシスコ、2013年8月21日の講話）。

人に耳を傾けること

聖書は、聞くことができる人には賛辞を惜しまないが、他人の言葉に注意を払わない人には辛辣である。「命を与える懲らしめに聞き従う耳は知恵ある人の中に宿る」（箴言15・31）。「だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい。」（ヤコブ1・19）。時にはちょっとした皮肉を込めてこう言う。「聞かない者に話すのは、（…）眠っている人を、深い眠りから呼び起こすようなものである」（シラ22・9）。

他人の言うことを聞かないようにさせる一つの問題は、よくあることだが、相手が話しているとき、その話しと関係のある何かを思い出し、そのことを話そうと相手が話すのを止めるのを待っていることである。そうすると、時には活発な対話が生まれるかも知れないが、実際は相手の言うことはほとんど聞かずに、互いに自分の意見を述べているだけということになる。

また時には、相手が黙っているので、頭を使って会話の糸口を探さないといけないという場合もある。そのような時に注意すべきは、こちらの頭脳の鋭さや博学さをひけらかすようなことを避けることである。それとは逆に、相手の言うことを聞きたい、相手から学びたいという態度を示すことである。事実そうすれば、こちらの興味の範囲を日々広げることができる。だから、最初はあまり面白くないように見えることにも注意して耳を傾けるのだ。それは偽善的なことではない。そうではなく、多くの場合自分の判断を差し控えようとする努力、相手を喜ばせ相手から学ぼうとする努力の表れである。

よい会話ができるためには、大胆さと慎重さを、好奇心と分別を両立させることが要求される。軽率な話し方に陥らないよう気をつけねばならない。例えば、軽薄な言葉やピント外れの言葉が思わず口を突いて出た場合、あるいはもう少し慎重に考えるべきだった事柄についてあまりに強く断言した場合など、進んでその発言を修正する覚悟を持つことである。いずれにしても、よい会話はいつも実を残す。例えば、後で議論の最中に出てきたうまい考えやよい説明の仕方が思い出されたり、新しい直観がひらめいたり、こうした考えや印象の交換を続けたいという願望が生まれたりする。

周りに開かれていること

まだ若いのに精神的に老いていく人がいるかと思えば、年老いてからも瑞々しい若さを保っている人もいることを見ると驚きに堪えない。誰もがいまだ使っていない多くの引き出しを内に持っていることを考えるべきである。例えば、まだ利用していない才能、試したことのない能力など。私たちは、いかに忙しく、いかに疲れていようとも、絶えず前進し、絶えず学び、絶えず他の人の考えを受け入れていかねばならないことを思い出そう。

自分自身に閉じこもるのではなく殻を破る必要がある。神に心を開き、神のために隣人に心を開くのである。そうすれば、豊かな現実を私たちの貧弱なものの見方や個人的興味の中に閉じ込めてしまう自己中心主義を克服し、隣人との間に壁を立て、自己の未成熟さを内に暖める何らかの欠点に陥らないように絶えず警戒をしていることになる。その欠点には次のような表れがある。よくわかっていないことについて有無を言わさぬ仕方で断言すること、他人は間違っていると言わんばかりに自分の意見を押しつけること、前もって作り上げた解決法や何度も言われた手垢の付いた助言を与えること、誰かが自分と異なる意見を言うと腹を立てること（そのくせ後から意見の多様性や寛容の精神を擁護するのだが）、周囲にいる誰かが目立つと嫉妬心を抱くこと、相手にも自分にも無理なレベルの完全性を他人に求めること、自分は自己を矯正することに抵抗するのに、他人には誠実さと正直さを要求すること、などである。

成熟さと批判的精神

隣人に対してやさしい心を持つなら、しばしば友人としての助言で助けることができることに気がつく。それを見た人もあったが、直接注意するだけの友情に欠けていたので黙っていたかも知れないことを、相手を信頼して言ってあげるだろう。ただ愛徳に基づいて行動するときだけ、注意や批判は真に有意義で建設的なものになる。「何らかの点で正してあげる必要のある時は、愛徳を忘れず、良い機会を捜し、相手を辱めることなくそうしなさい。しかも、正してあげたことからあなた自身が学び、その点で自己を改善するつもりでなければならない」（『鍛』455番）。

他人を改善させることができるかどうかは、ある程度、わたしたち自身が自分を改善できるかどうかに関係がある。自己改善がいかに難しいか、また同時にそれがいかに大切さですばらしいことかをわきまえているなら、他の人をそれなりに客観的に見て、効果的に助けることができる。自分自身にはっきりと注意することができる人は、他人に対してもいつどのようにそれを言うべきかを心得ており、また自分が注意を受けたときは素直にそれに耳を傾けることができる。

自分に対する批判に耳を傾け受け入れることができるのは、偉大な精神と深い知恵を持っている証拠である。「諭しを愛する人は知識を愛する。懲らしめを憎む者は愚かだ」（箴言12・1）。とはいえ、他人が言うことを受け入れるということは、いつも何を言われるか、何を言われないかを気にして行動することではない。なぜなら、そのような気遣いはほっておくと最後には病的なものになるからである。時々、立派な仕事をする人は批判の矢面に立たされる。自分は何もしない人たちが、そのよい仕事や生き方を自分の無為の生き方に対する非難と考えて批判するのもかも知れない（知恵2・10-20参照）。あるいは、逆の行動をする人たちが、自分たちの敵だと考えて批判することもある。また同じようなことをしている人たちが、嫉妬にかられて批判に走ることもある。

ひどいときには、何もしない人たちや自分たちを頼りにしないなら良いことは何もできないと考えている人たちに「赦しを願う」必要があることもある。こういうことが起これば、聖ホセマリアの次の助言を実行する機会が来たと考えよう。「あなたたちと私が沈黙し、祈り、働き、微笑み、そして希望することを習うべき時がきたという証拠である。それらの暴言を気にしないように。彼らを心から愛しなさい。Caritas mea cum omnibus vobis in Christo Iesu（私の愛はキリスト・イエスにおいてあなたたちみんなと共に）」（1964年3月20日、オランダのメンバーへの手紙）。

模範を示す責任

成熟した人は、一方で他人への開かれた態度と、他方で自己の道と信条への忠実を調和させる。ほとんど誰も自分に理解を示してくれない場合でも。周囲が無関心なら、こちらの側にも何か変えるべきことがある、あるいはせめて自分のことをもう少しよく説明する必要があると考えることはよいことである。しかし、私たちの側に決して変えてはならないものもある。何があっても、私たちの言うことを聞かれようが聞かれまいが、褒められようがけなされようが、感謝されようが無視されようが、認められようが否定されようが、守るべきものもあるのだ。「あなたの行ないは信仰の現われだから、衝突によって生じる対照こそ、あなたの持つべき自然さなのだ」（『道』380番）。

良かれと思って尽力しているのに、誰も助けてくれず孤独を感じることは珍しくない。そのようなときもう止めようという強い誘惑が襲ってくるかも知れない。自分の模範や証しはほとんど役に立っていないと見えるだろうが、しかしそうではない。一本のマッチの光は部屋全体を明るくしないにしても、部屋にいる全ての人に見える。おそらく多くの人は、その模範通りに生きることは自分にはできないにしても、自分のできる範囲で真似てみようと考えているのかも知れない。その模範は彼らの改善に役立っているのだ。

誰でも、自分が多くの人たちのよい模範のおかげで助けられたという経験を持っているだろう。しかし、その人たちのほとんどは自分がよい影響で誰かを助けたことに気づいていない。他人により影響を与えるという責任は重い。「怠慢や悪い模範であなたの兄弟である人々の靈魂を破滅させることは許されない」（『鍛』955番）。私たちは隣人に話しかけ、助言し、励まし、元気づける義務がある。しかし、とりわけ私たちの言葉が、行い、つまり私たちの生き様によって強められるようにせねばならない。それがいつもできるわけではない。いや多くの場合は無理であろう。しかし、みんなの支えになりたいと望み、悪い模範を示したなら心から赦しを願う事ができるように努めねばならない。

一生の戦い

隣人に開かれているということは、人生の一つの課題にどのように進歩しているかと密接に関わっている。その課題とは自分の傲慢を認め謙遜になるために努力することである。傲慢は、隣人との関係において思っても見ないような割れ目から進入してそれを毒する。もし傲慢というものをありのままに見るなら、その姿は吐き気を催させるだろうが、そのために傲慢は極めて巧妙に自分の顔を隠し、仮面をかぶって現れる。傲慢は一見すると積極的な態度の中に隠れているのが普通である。その後、傲慢がもっと強固になると、未熟な人格に固有な、より単純で直裁な現れが目立ってくる。すなわち、病的な猜疑心、絶えず自分について話すこと、虚栄心、きどった振る舞い方や話し方、えらそうな態度、それに反して自己の弱点に気づくときひどく落ち込むことなど。

傲慢は時には賢さの衣をまとう。それは知的傲慢とでも呼べるもので、過度の厳格さとなって現れる。また他の場合、正義を行い真理を守ることを激情的に望むという態度の裏に隠れる。その態度の底には、仕返しをしたいという望み、自分こそ正しい者で他人は自分に従うべきだという考えがうごめいている。あるいは、何でも正確に決めたい、すべてをきっちり判断したいという望み。つまり、真理に仕える代わりに、真理を言い訳にして自分が誰よりも優れていることを誇示したいという態度である。

完全無欠の健康というものが存在しないと同じように、人の心から傲慢をまったく消し去るということは不可能だ。ただ、私たちにできることは、傲慢が仮面をかぶって現れるとき、できるだけ早くそれを感知し、それに抵抗することだ。傲慢は欠点を極力見させまいとして私たちの面子を守ろうとするので、だまされることもあるだろう。しかし、私たちが自分の傲慢さを認めることができなくても、他人にはそれが見えることがある。友人の注意や建設的な批判に耳を傾けるなら、様々な仕方で隠れている傲慢の仮面を暴くことがより容易になるだろう。隣人に助けてもらうには、謙遜になる必要がある。また、隣人を優しく助けるためにも、謙遜になる必要がある。

つまるところ成熟さとは「常に人のことだけを考える。――このような、言わば〈健全な心理的偏見〉をもつこと」（『鍛』861）に帰着する。神が私たちにお望みになる人格、――誰もがそれを望むのだが、時々別の場所にそれを探してしまう――その人格は「愛する心、苦しむ心、隣人と一緒に喜ぶ心」（フランシスコ、2013年6月17日の講話）を持つに至った人のそれである。

アルフォンソ・アギロー

[Back to Contents](#)

隣人の気持ちをわかる

周囲で起こることを本当に理解するためには、多くの場合客観的なデータだけを知るだけでは足りないということを経験したことがあるだろう。例えば、友達のために何かの曲を演奏したとしよう。自分が大好きなその曲を聞きながら友達は楽しんだかどうかを知りたいと思うだろうが、友達が「君の演奏は正確だったよ」とだけコメントして、まったく喜びを表さなかったら、落胆するだけでなく、自分には才能がないのではと悲しくなるのではないだろうか。

もし隣人の心を、つまり彼らが期待し望んでいることをよりよく知ろうと努めるなら、人間関係でどれほどの問題がなくなることだろう。「愛徳は、『与えること』よりも、むしろ『理解すること』にある。それゆえ、隣人を判断する義務のあるときには、その人の言い分を捜してあげなさい。必ず見つかるはずだ」（『道』463）。愛徳を生きるためには、隣人が心を配るに値する人格であることを認め、その人の立場に立ってものを見る必要がある。他人の身になって考え、その人が置かれた状況を理解し、その気持ちを推し量ることを容易にする資質を、英語ではempathyと呼ぶ。この態度は、愛徳と結びつくと、人とのコミュニケーションを育て、聖ペトロの勧めのように「皆心を一つに、同情し合う」（一ペトロ3・8）ことに役立つ。

キリストから学ぶ

弟子たちは最初から主イエスの豊かな感受性を経験した。隣人の立場に立って考える能力、人間の心の底にあることを察知する敏感さ、他人の痛みを自分の痛みとする細やかさ、など。ナインの村に着いたとき、一言も説明を聞くことなしに、一人息子を亡くした寡婦の悲劇を理解した。ヤイロの願いを耳にすると、すぐに周囲で騒いでいる人々を静め彼の願いを聞き入れた。ご自分に付いて来る人々に何が必要かにいつも気を配り、彼らに食べ物がないとそれを何とかしようと言われた。ラザロの墓の前で泣くマルタとマリアとともに涙を流し、自分たちを受け入れないサマリアの村を天から火を降らして焼き尽くそうと提案した弟子たちの心の偏狭さに怒られた。

イエスは模範によって、隣人をどのように見るべきかを示し、隣人と感情を共有しその喜びと苦しみに付き添うように教えられる。イエスを眺め、周囲の人々の内面に関心を払うことを学び、恩恵に助けられてそれを妨げる欠点、すなわち注意散漫、気まぐれ、冷たい無関心などを徐々に克服していこう。この努力を中途半端に終わらせてよいものではない。「もし信仰生活にふさわしい徳を獲得していないなら、聖人ぶった徳を外面的に実行しても、無意味である。下着に高価な宝石をじかに飾るようなものだから」（『道』409）。主のみ心に近づくなら、私たちの心を暖かくし、イエスの心のようにすることができるだろう。

愛徳、親切、気持ちの同化

「キリストの愛とは、周囲の人々と気持よく接したり、博愛主義を標榜するにとどまるものではありません。神が靈魂に注入される愛徳は、内部より知性と意志を変え、善を

行う喜びと友情に超自然的な基礎を与えるものなのです」（『知識の香』71）。弟子たちが主とまじわり学んでいくうちに、その気質をなおしていった過程を見ていくことは楽しくさえある。彼らは非常に異なった性格の持ち主で、時には他人に対してあまり理解を示さないこともあった。ヨハネは、兄弟のヤコブとともに雷の子とあだ名されるくらい激しい性格であったが、後年柔和な人物となり、隣人のことに関心をもち、キリスト自身がされたように隣人のために自分を捧げる必要性を強調するようになった。「イエスは、わたしたちのために命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです」（一ヨハネ3・16）。

また聖ペトロも、以前はイエスの敵たちに対して厳しい態度を取っていたが、神殿に集まった民を前にして、辛辣さとは全く無縁の言葉をかけて、改心するように励ました。「兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。（…）だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです」（使徒言行録3・17、19-20）。

また聖パウロもよい模範である。キリスト信者を容赦なく迫害した後、改心し、自分の明晰な知性と強い性格を福音のために役立てた。アテネでは、ここかしこに立つ偶像を前にして心は怒りに震えたが、市民の思いを理解しようと努める。アレオパゴスでアテネ人に演説をする機会が与えられると、彼らの偶像崇拜と退廃した道徳を責めるのではなく、その代わりに彼らも神を心底から探していることを指摘する。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあついであることを、わたしは認めます。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見てみると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう」（使徒言行録17・22-23）。人々を理解し自分からやろうとする気を起こさせるこの態度には、知性によって感情を調整し完成する人の際立った特徴が見られる。それだけでなく、隣人の置かれた状況を理解しようとする人の非凡な才能も現れる。つまり、聴き手と波長を合わせ、彼が何に興味を抱いているかを把握し、完全な真理に導くために、どんなに小さなことに見えても、共感できる一つの面を探し出すのである。

真理を愛するための道

隣人を助けようとするとき、愛徳と柔和な態度を持つなら、人情豊かな論理で考えるようになり、冷たく親しみのない議論よりもずっと簡単に隣人の心を開かせることができる。神の愛によって、私たちは優しい振る舞いを保持し、キリスト教的生活がどんなに魅力的であるかを示すことができるようになる。「真の徳はいとわしくも悲しくもない。真の徳とはよろこばしく愛すべきものである」（『道』657）。真理を愛するなら、どんなにゆがんだ心の中にも神の痕跡を認めること可能にするからだ。こうして、各人の長所を発見することができるようになる。

愛徳があれば、友人や仕事の同僚、家族や親戚と付き合う中で、道を外れている人に対しても理解を示すことができる。彼らが信仰から遠ざかっているのは、ひょっとしたらよい信仰教育を受けなかったから、あるいは福音の真の教えを生きている人と出会わなかったからかも知れない。このように考えれば、隣人が正しい道を歩んでいないときでも、その気持ちをわかろうとする心構えを保つことができる。「私は暴力を振るう人を理解できません。暴力は相手を納得させるためにも打ち負かすためにもふさわしい手段ではないと思います。誤りというものは、祈りと神の恩寵と研究によって正すものです。決して力をもってはできません。常に愛徳をもって、です」（聖ホセマリア『会見集』44）。いつも忍耐をもって真理を語る必要がある。「愛に根ざして真理を語る」（エフェソ4・15）と言われている通りである。おそらく今は誤っているが、やがて神の恩寵に心を開くことができるようになるかも知れない人の立場に立つことができなければならない。この態度は、フランシスコ教皇の言葉を借りるなら、「足を止める、他

者に目を注ぎ耳を傾げるために心配事を脇に置く、道端に倒れたままにされた人に寄り添うために急用を断念する、一そのようにしたほうがよい場合がしばしばあります。時にわたしたちは、帰ってきた息子がすぐ入れるようにと門を開けたままにする、放蕩息子の父のようであらねばなりません」（『福音の喜び』46）。

使徒職と感情の交わり

相手の気持ちになるということ、単なる戦術と考える人もいるかも知れない。つまり、さながら商品を消費者に売り込む技術のように考え、商品を買わせる目的で親切を示すのである。このやり方は商売の世界では通用するのもかも知れないが、人と人との関係にはそれとは異なる論理がある。本当に相手の気持ちになるには、誠実さが要求される。それは利己的な利害を隠した表面的な親切とは別物である。

もし周囲の人々にキリストを伝えたいのなら、この誠実さは不可欠である。神が私たちの近くに置いて下さった人々の気持ちを自分のものにするなら、彼らとともに喜び彼らとともに苦しむという細やかな愛徳を持つことができる。「だれかが弱っているなら、わたしは弱らないでいられるでしょうか。だれかがつまずくなら、わたしが心を燃やさないでいられるでしょうか」（二コリント11・29）。コリントの信者に対するこのパウロの愛のこもった言葉のなかにどれほどの誠実な愛情が見られることだろう。このように感情を共有することができるなら、真理はより簡単に伝わっていくことだろう。というのは、コミュニケーションを強める、愛情の流れが確立されるからである。そうすると、魂は、耳が聞くことをより受け入れやすくなる。それが霊的な生活を改良する建設的なコメントであればなおさらである。

「聞く技術はまず、他者とコミュニケーションの中で寄り添うことのできる心の力で、これがなければ真に霊的な出会いにはなりません。聞くことは、冷めた傍観者としての状態をわたしたちから取り除いてくれる、適切なことばやふさわしい態度を見つけられるよう助けてくれます」（『福音の喜び』171）。相手の言うことを関心をもって聞くならば、彼らが置かれている状況を把握することができる。そうすれば、その時に主が求めていることを見極めることができるように彼に手を貸すことができる。他方、相手が自分の状況や意見や思いに敬意が払われていると感じるなら、魂の目を開いて、真理が冷たいものではなく暖かいものであることを見て理解することになるだろう。

それとは反対に、隣人の事に対する無関心は使徒的な人にとっては致命的な病である。周囲にいる人々から距離を置くことはだめである。「あなたのことを良く思っていないあの人も、あなたが彼らを〈ほんとうに〉愛していることに気付いたら、考えを変えるだろう。あなた次第なのだ」（『拓』734）。隣人への理解を示す言葉、小さな親切、楽しい会話などは、相手に対して誠実な関心を持っていることを表す。好かれる人になることができると、主との付き合いのすばらしさを分かち合う友になることが容易になる。

前進することを励ます

教皇フランシスコは、次のように言う。「よい同伴者は、運命論者でも臆病者でもありません。つねに他者を励まし、いやされたいと願うように、自分の床を担ぐように、十字架を抱き締めるように、すべてを捨てるように、福音を告げるために再び出かけるように、いつも招いています」（『福音の喜び』172）。隣人の弱さを理解する人は、中途半端な妥協はしないように、聖性という目標を探し続けるように奮い立たせることができる。

このようにすることで、隣人を深く理解した上で優しく要求するという主の模範に従うことになる。復活の日曜日の午後、エマウスの弟子たちに付き添われたとき、彼らにこう尋ねられた。「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」（ルカ24・17）と。そうして、彼らがどうして心を消沈させていたかや、主が復活されたという婦人たちの伝言をなかなか信じられないことなどを語るままにさせて、彼らの心の重荷を

下ろさせた。彼らが話すだけ話してから、主は口を開かれ、「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」（ルカ24・26）と説明された。

イエスはどのような話しをされたのだろうか、どのようにしてエマウスの二人の弟子の不安に答えられたのだろうか。ともかく彼らは最後に「一緒にお泊まりください」（ルカ24・29）と言った。最初には預言者たちの言うことを理解しないと言ってしかられたにも関わらず、である。ひょっとしたら、声の調子や優しい視線などが、彼らをして叱責を素直に受け入れさせたのかも知れない。しかし、彼らは自己を変えるように招かれた。私たちと接する人々が、私たちが彼ら一人一人に敬意を持っていること、その気持ちを理解しようと努めていることに気づき、そうして信仰生活をもっと豊かにしたいという積極的な態度をとることができるように主の恩恵を乞い求めよう。

ハビエル・ライネス

[Back to Contents](#)

家庭は成長の場 (1)

あの子はお母さんそっくりだ。笑い方や話すときの手の動かし方、そして歩き方なども…。このようなコメントはよく耳にする。それというのも、実際私たちはほとんど気づかないままに、両親や兄弟の人となりから多くのことを真似ているからだ。その中には目の色とか気質とか体つきのように遺伝的な面もあるだろう。他方、日々の人との付き合いや教育を通して、身につけたものもある。

このシリーズで見てきた成熟した人の資質は、家族の中で生まれ育つ。それを考えると、家族の役割がいかに重要かがわかる。家族は、そこで私たちが生まれ、育ち、死んでいく良い場である。「わたしたちはどんな時期にも、どんな状態にあっても、どんな社会的状況に置かれても、自分が子供であり続けることを深い喜びのうちに認識するのです」（フランシスコ、2015年3月18日の一般謁見）。

神が望まれた家族という制度には、父であろうが兄弟であろうが、また子供であろうがみんなが責任を分担する。

家庭とはみなで支えるもの

私たちは自分の家族を選んだのではない。神がそれを選ばれた。神は、私たちがキリスト者にするため、両親や兄弟の徳だけでなく、欠点も考慮に入れておられた。「このことについては誰もが経験したことですが、家族の中では、今の私たちが、手にしているもので、奇跡が起こります。・・多くの場合、それは理想的なものでもなく、こうあって欲しいというものでも、こうあるべきだというものでもありませんが」（フランシスコ、2015年7月6日の説教）。

家族の全員、すなわち祖父母、両親、子供たち、孫たちは、家族にキリスト教的な雰囲気醸し出すために、各瞬間に自分自身の最もよいものを与えるよう呼ばれている。家族というものはみなで支え合うものだ。両親も子供とともに成長し、年が経つにつれて、家族内での役割は変化していくこともある。みんなを支えていた人が、支えてもらう側になったり、先頭に立っていた人が最後になったりする。家族は衣食住などの基本的必要性を満たす場よりもずっと重要なもので、そういうことの他に、本当の人間的な価値の美しさを見つける場である。克己の精神や隣人への敬意といった健全な人間関係を保つために必要な価値を見つける場である（聖ヨハネ・パウロ2世『家庭』66参照）。あるいは、責任感や忠実さや奉仕の精神を身につける場とも言える。これらの価値は、ゆっくりと陶冶されていくものだが、あるグループに属しているという単純だが堅固な感覚を必要とする。それは単に世界に投げ出されているのではなく、最初から愛情によってできた世界の一部、すなわち家庭の中で受け入れられていると感ずることである。

神ご自身が「この世に来られるにあたり、ご自分がお造りになった人間の家庭の中に来ることをお選びになりました。神は、その家庭をローマ帝国のはずれの人里離れた村にお作りになりました。帝国の中心地であったローマではありません。（…）こう言う人もいるかもしれませんが、『わたしたちを救うために来られた神は、そのような辺境の貧しい土地で30年間を無駄に過ごしたのではないのでしょうか』と。イエスは30年を費や

しました。イエスにそれが必要だったのです。イエスの道はその家庭の中にありました」(フランシスコ、2014年12月17日の一般謁見)。

愛されていることを知ること

この地上では、今日も大勢の人が生まれている。しかしながら、各人は唯一無二の存在で、永遠から望まれて生まれてきた存在だ。「私たち一人ひとは、神の計らいに基づいて生まれたのです。私たち一人ひとは、神から望まれ、愛され、必要とされています」(ベネディクト16世、2005年4月24日の説教)。

ひとりとして偶然に生まれてくる人はいない。一人ひとは大きな価値を持つ存在だ。それは両親を知らない場合でも、あるいは別の家族に養子にもらわれた場合でもまったく同じである。「一人ひとりの霊魂は、かけがえのない宝、一人ひとりの人間は唯一の存在です。キリストは一人ひとりのために御血を流してくださったのですから」(『知識の香』80)。両親が誰であろうと、どんな欠点を持っていようと、両親から受けた恩は大きい。

子供が生まれてまだ間もないのに、母親はもうあかちゃんが泣くとき何を求めているのか、眠たいのかお腹が減っているのかを見分ける。次にあかちゃんが微笑み始める。それは個性の芽生えで、同時に子供らしい特徴である人まねの最初の現れである。幼児は見る物を何でも自分のものにしてしまう。両親は子供にとって安心が生まれるところである。幼児が知らない人が近づくと、父親や母親の足にしがみつくとよく見られる光景は、それを明快に示す。この守られているという安心感から、子供は自由に動き自己を出て世界を探求し、隣人に心を開くことを学んでいく。

生まれつきの性質と教育だけによって人の人格が全面的に決定されるというわけではないが、人格の調和のある成長のために、子供が最初の瞬間から家族の中で愛されていると自覚することは決定的である。まず愛を受けて初めて、後で隣人を愛することができるようになるのである。愛情と世話——誰もが持っている自己中心の傾きを直していくための要求と剛毅も含まれるが——を受けることによって、子供は自分と隣人が価値あるものであることを知るようになる。両親の優しく強い愛は、子供が自分を正しく評価し、それゆえに隣人を愛し、利己主義を捨てることを可能にする。

キリスト信者の家庭で生まれる愛の絆は、死によってさえ消滅しない。もしまだ小さいときに親を失うことがあっても、その場合信仰によって、すでにこの世でイエス、マリア、ヨセフが、多くの場合寛大な他の人たちを通して、親代わりになってくれることを知る。聖家族にならって、非常に人間的に、同時に非常に超自然的になるように努めよう。そして、アビラの聖テレジアが書いたことが実現する日が来ることを期待しよう。「私は自分が天国にいるように思えました。そしてそこで最初に目にしたのは父と母でした」(『神の憐れみの人生』38章)。

真の自己実現

「おかあさんは食事を作ることが好きだったの。洗濯は。お掃除は。私たちが学校に連れて行くことは」などと娘から尋ねられ、もう年老いた母親の脳裏に昔の思い出がよみがえってきた。家族の問題に悩んだ日々、家事に疲れてぐったりした日々、家計が火の車で家計簿とにらめっこしたこと、小さな子供たちが高熱を出した冬の日々などなど。時にはいらいらが募って皿を何枚か壁にぶつけたこともあった。そのような思い出にふけて、こう簡単に答えた。「好きだったかと言えば、そうね、それほど好きではなかったわ。でも確かなことはあんたたちを愛していたということかな。あんたたちが大きくなるのを見ると嬉しかったわ」と。世の中のどれほど多くの母親や父親が同じことを言うだろうか。教皇は、これらの親は立派な賞を受けるに値すると言われる。なぜなら、彼らは「偉大な数学者でさえ解けないような難解な問題を解く方法を知っています。彼らは24時間でその2倍分の仕事をこなします。それはノーベル賞に値するくらいです。24時間で48時間分の仕事をするのです。私は一体どうやってそれをするのかわ

かりませんが、ともかくやっているのです。家庭にはそれほど多くの仕事があるので」と（2015年8月26日の一般謁見）。

家族は完全ではないが、調和を保ち、家族の一人ひとりの個性をよく見極める。両親は権威を持つが、それを子供に押しつけようとはしない。子供を自分たちの望み通りの人間にしようとするのではなく、親の指導と愛情の下に彼らの可能性を伸ばすように導く。家族のよい雰囲気を作る責任は父親にも母親にもある。それぞれが互いに譲り合い、また自分を子供に与えることによって、家庭は人間的な成長の場となる。

また、家族の共同生活は個人の才能を見つけることを助けてくれる。それは、本人はなかなか気づかないが、周囲の人は容易に発見する、優しさ、元気のよさ、ユーモアなどである。家族を愛することによって、困難の最中でも、各人は自分の性格の最もよいもの、肯定的な面を引き出しことができるようになる。疲れや緊張のために、悪い面が現れたなら、赦しを願って再びやり直す時がきたのだ。「自らの過ちを認めることによって、また失われたもの——敬意、誠意、愛——を取り戻したいと願うことによって、人は赦されるに値する者となります。このようにして、病が癒やされます。謝ることができなければ、赦すこともできません。謝ることができない家庭は、息苦しく、よどんだ雰囲気になってしまいます。『ごめんなさい』というこの大切なことばが失われると、家庭内に多くの苦しみや傷が生じ、涙が流れます」（フランシスコ、2015年5月13日の一般謁見）。

女性は母親としての自分のもつ資質が代替不可能なものであることを発見するだろう。この母親の役割を果たすことで神に忠実になろうと努めるなら、家庭が居心地のよい場となり、家族皆が愛情や他者への敬意や、犠牲と自己放棄の精神を身につけ、個人的に成長することに貢献するだろう。「女性に託されている使命とは、家庭や社会や教会に、女性だけが持ち、提供することのできる何か女性に独特の貢献をすることです。細やかな優しさ、疲れを知らぬ親切、具体的なものへの愛、素早い機知と直感、謙遜で篤い信仰心、粘り強さなどは、女性のもつ貴重な特質です」（聖ホセマリア『会見集』87）。

父親も自分が子供たちの導き手であることを発見するだろう。父親は子供が成長するのを手助けし、彼らと遊び、一人ひとりが個性を伸ばせるように見守る。キリスト教徒の父親は家族が自分の第一の事業であること、その中であらゆる次元において自分を成長させるビジネスであることを知っている。そのため、あまりにも心身共に消耗させる生活リズムには注意しなければならない。それによって、最も価値のある目標を見失い、精神的に崩れ、家族の関係を破壊する可能性があるからだ。

それゆえ、両親が子供のそばにいること、子供たちに心の智恵を伝えることの誇りをたえず培うことは、非常に大切である（フランシスコ、2015年1月28日と2月4日の一般謁見参照）。両親が子供のそばにいないことは多くの問題を引き起こす。「明るく楽しい」家庭において、父親と母親はそれぞれ自分の役割を果たす。この父と母の役割は、誰かに代わってもらうことができず、互いに補い合いながら、心を満たすのである。このことは、神が何人の子供を送って下さるかとは関係ない。子供が一人も来ない場合、家族の他の人たちや友人たちに対して霊的な父親や母親の役割を果たすことができる。

待つことと約束すること

「私たちは普段はあまり意識していないかもしれませんが、この世界に兄弟愛を伝えるのは何あろう家族なのです」（フランシスコ、2015年2月18日の一般謁見）。民族の基本的な構造や国々の平和などは、一生の間忠実を保ち男女が互いに自己を捧げ合う家庭の上に築かれる。

今日では、多くの人が冒険を夢見ている。その望みに応じようとする企画は無数にある。これ以上ないほどの種類の、刺激的で、瞬間的、感動的なもの、例えば深海への潜水、大空の飛翔、高いところからの飛び込みなどが人々を魅了する。結婚して家庭を持

つという約束は、それらと比べてずっと目立たないが、いつも驚嘆を引き起こす。なぜなら、私たちは永遠に愛するために作られており、とどのつまりそれ以外のものは苦い味しか残さないからだ。永遠に続かない愛は、小文字の愛、つまり本当の愛ではない。

家族生活では様々な逆境や危機に直面するが、家庭を作る約束への忠実はいつもいかなる逆境や危機よりも強い。「愛は死と同じく強い」（雅歌8・6）。大きな困難があっても、しっかりした動機があれば、それをたえることができる。しっかりした動機とは、単なる思想や制度ではない。それは何よりも人である。愛に応えることは各人の心の最も深いところに及ぶので、それを拒否するとき、私たち自身が傷を負う。

言うまでもないことだが、偉大な計画はつねに大きな危険を伴う。今日では多くの若者が、間違えることを恐れて、いつまでも続く約束をすることに二の足を踏む。しかし実際、心に呼びかけを感じながら愛の扉の前で留まることはより大きな誤りである。それゆえに、心を固めること、心を成熟させることが必要である。これが婚約期のキリスト教的な意味である。「婚約期は、果実のように熟する人生の一時期です。それは、結婚する時まで、愛のうちに成熟する道なのです」（フランシスコ、2015年5月27日の一般謁見）。結婚に対して「はい」と言えるための最もよい訓練、またその堅固さを得るための最もよい試験は、教会が婚約期にある二人に疲れることなく求める待つ能力である。ときにそのわけが正しく理解されないこともあるが・・・。「あらゆるものを性急に――直ぐに――求める人は、最初の試練（第一段階）で、すぐにすべてをあきらめます。（…）婚約期には、たとえどんな誘惑されても、決して売ったり、買ったり、裏切ったり、捨てたりしてはならないものを一緒に守ろうとする心が重要なのです」（フランシスコ、2015年5月27日の一般謁見）。

その愛を夫婦そろって守ろうとする両親から子供は学ぶ。そういう家庭から最良の市民が生まれる。共通善のために自分を犠牲にすることを厭わない人、自分の仕事であろうが他人のための仕事であろうが、いつも心を込めて働く人、高い目標を目指す職業人、首尾一貫した政治家、依怙鼻鼻をしない弁護士、献身的な医師、料理を芸術に変える料理人などなど。このような家庭の中で成長する子供は、忠実な母親、忠実な父親になり、あるいは、共通の家族である人類に奉仕するために自己のすべてを神に捧げる。この独身の召し出しを受ける者たちも、別の仕方でよき母、よき父の役割を立派に果たす。

この冒険は時間が過ぎても継続する。家は狭くなり、新しい愛と家庭が生まれる。活気が、生きる喜びが再び生まれる。「人々の希望と世代間の調和は強く結びついています。子供が喜ぶことにより、両親の心は躍り、未来が再び開けます」（フランシスコ、2015年2月11日の一般謁見）。

ウェンセスラオ・ビアル

[Back to Contents](#)

家庭は成長の場 (2)

昔の合戦について暖炉のそばで熱い議論が交わされている。一人が誰も思ってもみなかった発言をした。「そういった武勲に引けを取らないような、困難でかつ輝かしい勝利や戦いや偉大な犠牲や英雄的な高貴な行為（一見すると、軽率で矛盾に満ちたように見えるが）がある。それが難しいのは、それについての報道もないしそれを見る観衆もないからだ。しかし、毎日社会の最も隠れた隅っこで、小さな家庭の中で、大勢の男女の心の中で行われている。ここれらの目立たない戦いのどんなものでも、もっと反抗的でひねくれている人にも生きる喜びを取り戻させ、人間への信頼と希望で満たすことができる。

人類の将来は外交の重要な条約によってだけ決められるのではない。日々の戦いにおいて、平凡な家庭のなかの「忍耐強い愛」（フランシスコ、2013年10月27日の謁見）の仕事によって作り上げられる。生涯にわたる人間の成長、特に「中に向かって成長する」（『道』294）ためには、どうしても多くの人の協力が不可欠である。みんなが一緒になって、靈魂の帆に神の息吹を受けながら、神のペースで前進するのである。

同じ空気を呼吸する

キリスト教的な家庭では、仕事や心配、成功と失敗などは皆で分かち合う。皆がすべてに関わり合い、同時に一人一人の独立も大切にされる。子供たちはのびのびと生きるように教えられるが、各自の好き嫌いの中に閉じこもらないように注意される。家庭では、みんなを結びつけるものが評価される。それは、みんなが心地よく呼吸でき、それによって成長していくことができるようになるきれいな空気のようなものである。

家族のよい雰囲気維持するという仕事には、全員が重要な役割を持つ。最も小さい子供も例外ではない。そのため、小さい子供たちにもその年齢に見合った責任を分担させるのがよい。それは、彼らが自己中心にならず、家はみんなの協力で支えられることを理解させるためである。たとえば、庭に水をやること、テーブルの準備をすること、布団を敷くこと、自分の部屋を片付けること、下の兄弟の面倒を見ること、買い物に行くことなどなど。また、少しずつ家族の話し合いにも参加させていくこともよい。家族の計画を押しつけるのではなく、彼らの意見を聞きながら決めていくことで彼らにも魅力のある計画となるだろう。こうすれば、誰も蚊帳の外に置かれることはなく、他の人々にも関心を払う開放的で寛大な態度を涵養できるだろう。

愛情があれば、他の人の生活に歩調を合わせることができる。そのためには、休暇を一緒に過ごすことや、人を結びつけ多くのよいことを楽しむことを可能にする活動を一緒にすることなどは役に立つ。逆に、苦しいことに直面するとき、愛情はその重荷を分け持つようにさせる。「互いに重荷を担い合いなさい。そのようにすれば、キリストの律法を全うすることになります」（ガラテヤ6・2）。自分の家では誰も他人のように生きることはできない。つまり、自ら進んで何ができるかを考え、目を上げて周囲の人に注意を払う必要がある。他の人たちは何が好きなのか、どういう計画を考えているのか、どういう友達がいるのか、仕事は何か、何か心配ごとがあるのか、など。これらのことを考えるには時間が必要である。しかし、まさにこの時間こそ、父親が子供に与えることのできる、また子供が親に与えることのできる最も価値あるものなのである。

キリスト教的家族にも規律や秩序が必要だ。しかし、その規律は優しさを感じさせるものである。そうであれば、子供は年上の家族の背中を見ながら、自然に少しずつ学んでいく。子供をしかるときには、愛情を裏に秘めた丁寧な仕方であるべきである。それだけでなく、なぜしかるのかそのわけを説明し、「自分の不機嫌を他の人々にぶちまけない」（『知識の香』174）ように努める。はっきりと物を言うべきときもあるが、子どもが徳や価値観を本当に身につけるのは、親がそれを実践しているのを見るときであることを忘れてはならない。日常生活の中で親が剛毅、節制、慎み、質素などを実践しているなら、子供はそれらを本当に大切なものと自覚するだろう。彼らにとって、それらの徳は空気のように当たり前のことになるからだ。これは特に愛情の教育（性教育）において言える。つまり、両親が日常生活の中で細やかな愛情を互いに示すなら、――もちろん夫婦の間の親密さの中にしまっておくべきものは別として――子供たちに性の正しい積極的な意味を理解させることが容易になるだろう。

「親であるあなたに忠告するとすれば、何をおいても次のことを言いたいと思います。あなたがたが信仰に従って生きようと心を配っていることを子どもたちが感じとるように。子どもは、小さいときからすべてを見、判断しています。神が単に口先だけではなく、行いにも現れるように努力してください。そしてお互いに信頼し合い、心から愛し合いなさい。これが子どもたちを真のキリスト信者に育てる最もよい方法なのです」（前掲書、28）。

ありがとう、すみませんが、ごめんなさい

明るく楽しい家庭には、うちとけた単純な人間関係が存在する。同時に親しいからといって、細やかさに欠けた無礼な態度を取るわけではない。私たちは誰でも欠点があり、してはいけないことをしたり、他人を傷つけたりする可能性がある。他方、他人の無理解や誤解を前にしても、恨み心を抱かず、気にしないという能力も持っている。親子、兄弟の間など、あらゆるレベルで、ポジティブな面、分離させるのではなく一致させるよい面に目をやるよう努める。どのような共同生活でも、時々口論やけんかが起こるが、その日のうちに仲直りするべきである。「よく聞いてください。夫婦げんかをしたことがありますか。子どもの皆さん、皆さんは両親とけんかをしたことがありますか。大げんかになったことがありますか。それはよいことではありませんが、本当に問題なのではありません。問題なのは、その気持ちのまま次の日を迎えることです。けんかをしたとしても、家族と仲直りをしないで一日を終えないようにしましょう」（フランシスコ、2015年5月13日の謁見）。

本当に隣人を愛する人は、隣人を理解し赦すことができる。いや、理解し赦すことを必要としていると言える。そういう人はこの振る舞いを家庭から社会に伝えていく。ジャングルを開拓したいなら、まず自分の庭から始めよう。つまり、「自分の部屋で、自分の家で、自分の職場で」表される「日常生活のエコロジー」から手をつけるのだ（フランシスコ『ラウダート・シ』147）。家庭とは、「人格的成熟における調和のとれた成長を可能にする全人的な教育を受ける」場である。「家庭の中でわたしたちは、無理強いに頼むこと、受けたことに対する心からの感謝の表現として『ありがとう』ということ、攻撃や強欲を慎むこと、傷つけてしまったらゆるしを請うことを学びます」（前掲書、213）。

こういう態度を身につけるなら、家族生活に起り得る問題を相対化でき、違った状況ならもっと簡単だろうにという幻想に陥ることを免れる。わたしたちには外の人のことを理想化する傾向がある。均衡のとれた精神の持ち主でさえ、友人や知人のよい点を過大評価し、身近な家族の欠点や過ちを必要以上に厳しく見ることも珍しくない。我々がこのような傾向を持っていることを自覚し、矯正することは極めて大切である。たまにしか見ない人が笑顔や親切な行為を示したとしても、それが彼の常の姿というわけではない。逆に兄弟姉妹が、いやな一日を過ごしたりよく眠れなかったりしたため、無愛想な態度をとったとしても、それが彼らの真実の姿でも、心中の思いを表しているのでもない。それだけでなく、人は信頼している人の前では、自分の本当の姿をさらけ出しやすくなり、そのために容易に否定的なコメントが出てくることもあることも思い出すのが

よい。そのような状況では、真の愛情を持つ者は、相手の苦しみを理解しようと努める。時には、その人の愚痴や不満の聞き役を買って出ることも敢えてするだろう。

人の成長ということは、それぞれの困難を伴う諸段階を経ながら達成されるもので、多大の忍耐が要求される。人は一朝一夕に成熟するものではない。とりわけ思春期の子どもは、ある程度の期間、家庭の空気をぴりぴりさせ、時には対立を作りだし、大人も子どもも緊張した雰囲気にも包まれる。しかしそれも時間が解決してくれる。その危機を上手に乗り越えるなら、それが終わると家族はより強固になる。水は河床に戻るだけでなく、より豊かにきれいな水になるのだ。

自然の法則に従って、思春期に入った子どもたちはより大きな自由を主張し始め、家族とは離れて、閉鎖的な友人グループを作り、一人で行動しようと試みる。しかし、たとえ本人は認めなくても、彼らは両親のことを忘れたわけではない。それゆえ、親は強権的な振る舞いを避けるようにし、話しやすい友達のような関係を築くことが重要である。親は子どもが自分で決定するように励まし、気をつけるべきことを示す。どこに危険な岩礁があるかだけでなく、行く価値のある港の方向も教えるのである。確かに言葉や規則を作ることも役に立つが、こういうことは多くの言葉や規則より、行いの模範によってよりよく伝わる。

いずれにして、子どもを信用することが重要である。というのは、相互の信頼関係があるところのみ自由は成長するからだ。聖ホセマリアは次のように言う。「時にはだまされるのもよいでしょう。子供への信頼があれば親の信頼を濫用したことを、子供自身が恥じて改めるときがくるからです。しかし自由もなく、信頼されていないと感じるような状態なら、子供はいつも嘘をつきたい衝動にかられるのではないのでしょうか」(『会見集』100)。

一緒に祈る家族は一致を保つことができる

家族はまた神とのつきあいを学ぶ場、祈りの学び舎でもある。聖ホセマリアは子どものとき母親から習った祈りをとても大切にしていた。「母親なしには、新しい信者は生まれません。それだけでなく、信仰そのものからも、純粋で深い温かみがほとんど失われてしまいます」(フランシスコ、2015年1月7日の謁見)。普通は両親が子どもに信仰の道を教える。しかし逆の現象も珍しくない。神の御摂理は、時に子どもを使って父親や母親が信仰の素晴らしさを発見させることもある。

多くの場合、家族と一緒に祈ることは可能であり、有益である。「ともに祈る家族は一致を保ちます」(聖ヨハネ・パウロ2世『おとめマリアのロザリオ』41)。気取りのない普段着の信心行為は家族の内部だけでなく外部をも照らし、知らず知らずのうちに日常生活の他の活動にも影響を及ぼしていく。あちこち動き回る子どもたち、家の多くの仕事などによってときどき気が散ることがあってもかまわない。わたしたちの側でできるだけの努力をしているなら、天の神様はこれらの注意散漫の祈りをご覧になって微笑んでくださるに違いない。

忠実な夫婦の家庭からは新たな忠実な夫婦になる若者が生まれる。また神の召命に答え、独身の召しだしの道を進む多くの若者も生まれる。異性への愛も神への愛も家族の中の愛情と競合するのではなく、むしろそれを強化する。いつも、人生のいかなる場面でも、わたしたちの体には同じ血液が流れている。たとえ色んな仕事や義務によって遠くに離れて暮らしているとしても、家族は一致している。成熟の一つの印は、妻や子どもへの義務と、自分の両親や兄弟への愛情を両立させる能力である。それは時とともに身につけていくものである。この二つの家族は祈りによって助け合う。それは単なる慰めではない。「兄弟に助けてもらおう人は強い城のようだ」(箴言18・19)。

家庭から周囲の世界に

家庭という豊かな泉は、家庭内で枯れ果ててしまうのではない。人は自分を忘れて回りに奉仕することによって成熟するのと同じく、家庭も外の世界に開くことで成長する。キリスト教的家庭は、成長のために必要な家族の雰囲気とプライバシーを守る扉を持つが、それは息ができないような堅苦しきでも、外の世界に目をふさぐことでもない。

それゆえ連帯の精神はキリスト教的家族の使命の重要な部分である。つまり、創造性をもって自らの殻を破り、最も困っている人々を探しに出て、社会の文化や教育の発展のために働き、共通の家である地球の保護などにも気を遣うのである。人類が直面する困窮は多種多様で、多くの場合、あるイデオロギーや少数派が緊急の課題として声高に訴えるものとは別物である。家のない難民を助けようとする家族、すでに子どもがたくさんいるのに新たに養子を引き受ける家族、英雄的に経済的困窮に立ち向かい、自分の家族や他の家族のために自己を犠牲にする親たち、他の家族を助けるために働く子どものない夫婦、など、なんと素晴らしい模範がわたしたちの周りで見られることだろう。最もよいことに、「すべては家族に返ってくる」。つまり、これらの活動で一番利益を受けるのは家族自身なのだ。そして、このような家族によって社会は変わっていく。無償で誠実な愛を学ぶ場である家族は「自己中心的な個人主義の蔓延への特效薬です。」

(フランシスコ、2015年1月7日の謁見)。「常にひとのことだけを考える。——このような、言わば〈健全な心理的偏見〉」(『鍛』861)の中で育った人は、他人の話に耳を傾けること、理解すること、一緒に生活すること、自分の兄弟である人間の具体的な問題を解決することに喜びを見いだす。

家族は孤立していない

家族がその成員に、また教会と世界にどれほどの善をなすことができるかを考えると心が高鳴る。同時に、現代の家族が困難な時期に遭遇していることも誰の目にも明らかである。しかし、家族はひとりぼっちではない。多くの人々が、子どもの教育の仕事において親を助けるために時間とエネルギーを費やしている。学校、若者のためのクラブ、その他の多くの活動、それらは若者の教育や高齢者の世話にとって、時には欠くことのできない支えとなる。また家事(母親だけの仕事ではない)を支えることも、キリスト教的家庭のもう一つの使命である。それゆえ、この分野での知識と経験を伝えるために尽力する人たちは、「多くの大学教授よりも教育的にははるかに有益なことができるのではないかと私は思っている」と聖ホセマリアは言っていた(『会見集』88)。

この小論を終わるに当たって、子育てに多大の時間とエネルギーを費やしたのに、結果が思わしくなく、やり方を間違ったのではとか、もっとできたはずではないかという後悔の念に打たれる場合を取り上げよう。実際、悲しいことだが、なんと多くの親が可能な限りの善意をもって子どもを育てたのに、成長した我が子が肉体的精神的問題を抱え、あるときには信仰から離れたり乱れた生活に陥ったりするのを見て苦しんでいるとか。もしこういう状態になったら、これからの対策を考えるだけでなく、あの放蕩息子の父親をまねるときだと考えよう。子どもの自由を尊重しつつも、彼が過ちを正したいという望みの発端が現れたら即座に助けの手をさしのべる心構えをもって彼に会いに出向くのである。そして天に向かってこう言おう。「私の神よ、次はあなたの番です」と。「親は忍耐強くなければなりません。待つよりほかに何もできないときもしばしばあります。祈りながら忍耐、優しさ、寛大さ、そして慈しみをもって待つのです」(フランシスコ、2015年2月4日の謁見)。

ウェンセスラオ・ビアル

[Back to Contents](#)

© Fundación Studium

www.opusdei.org